
狼の恩返し

kuro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼の恩返し

【Zコード】

Z6598P

【作者名】

kurro

【あらすじ】

昔、自分の怪我を治してくれた少女。

その少女に受けた恩を返すためにガルーは一族をぬけ出す。

そして、ガルーは王都で少女を見つける。

ガラの悪い主人公が、昔の恩人に不器用にも恩返しをしようと頑張る話です。

旅立ち（前書き）

リハビリがてらに書いたものです。
基本的に作者の好きなことを好きなように書きます。
自分に合わないと思ったらすぐに戻るボタンをどうぞ。

旅立ち

ザザツ ザザツ

深い森の中、何かが草を掻き分け走る音が聞こえる。

ザンツ

そして、その音は何かが森を抜けた事で聞こえなくなつた。

変わりに聞こえてくるのは人の話し声。

声からしてまだ若い一人の男の声だ。

「……」ここまで来ればさすがに大丈夫だろ。」

そう言って一人目の男が今抜けた深い森を見ながら言った。

その男は全身黒ずくめの服を着た黒髪黒瞳の若い青年だつた。

黒でないとこからは、肌と青年の髪を馬の尻尾のようにまとめている
白い紐ぐらい。

青年は野生的な顔つきとその格好のせいであるで盜賊のよつに見えた。

そして、もう一人の男がその黒ずくめの青年に声をかけた。

「いいのですか？ 長年すんでいた集落をこんな方法で抜けて」

黒ずくめの青年に対して、二人目の男が澄んだ美しい声でそういう
た。

その男の風貌はさきほどどの声の主にふさわしく、スラリと背の高い
銀髪の青年だった。

まるで女のよつこきめ細かく白い肌、細身で均整のとれた体。

そして、その顔はまるで一流の職人が手がけた人形や彫像のように
驚くほど整っている。

黒ずくめの青年と同じようにこちらも黒い服を着ているのだが、こ
ちらはどうわけだかまるで礼服を着た貴族のように見える。

「……。」

その姿をあらためて見た黒ずくめの青年は、銀髪の青年の言葉に憮
然として答えない。

そんな黒ずくめの青年の反応に銀髪の青年は苦笑い。

「おやおや、どうしましたガルー？ そんな苦虫を噛み潰した顔を
しては悪人顔がさらに凶悪になりますよ」

そして銀髪の青年は、黒ずくめの青年に対してかなり傷つく事を苦
笑いしながら言った。

それに対して、黒ずくめの青年は銀髪の青年が言つたように舌虫を噛み潰したような顔で銀髪の青年を睨んだ。

「… なあルース、お前はついてくる必要ないだろ？　自分の領地に帰れよ」

「嫌です。面白うつなのでついてこきます。」

「… めんどくせえ奴だなホント」

「まあまあ、そんな嫌そうな顔をなさらずに。」いつ見えて私結構役に立ちますよ？ 領地の人間とは仲良く交流しているので、人間社会の常識や知識も豊富です。… それに」

「あん？」

なにやらルースと呼ばれた銀髪の青年が自分の懐からガサガサと何かを取り出した。

「ほり見てくださいよコレを」

そいつ言つて懐から出したのは指輪や大粒の真珠に宝石。

それを見たガルーと呼ばれた黒ずくめの青年は少し呆れた。

「おいおい、手癖の悪い奴だな。城から盗んできたのか」

「失敬な！　これは随分と昔に女性達に送られた貢物の一部です！」

それに対して銀髪の青年は少し怒る。

「どうやらネババしてきたと思われたのが気に食わなかつたらしい。」

「あー、はいはい。俺が悪かつたよ」

ガルーと呼ばれた青年はさうして投げやりに銀髪の青年を宥める。

「わかればいいのです。わかれば」

「といふでそれをどうするつもりだ」

「街で換金します。」

「…やうかよ」

悪びれもせずにさう言つて田の前の銀髪の青年に何んなつするガルー。

しかし、こつまでも森の出口でこんな事をしているわけにも行かないでの、少しづつ歩き始めるガルー。

それに並ぶようにして歩くルース。

ルースは歩きながら横にならぶガルーに声をかける。

「もう行へのですか?」

「…………。」

「せめて一言ぐらこ声をかけてあげれば良いではないですか?」

「…………。」

「なぜ何も言わずに出て行へのですか?」

「…………。」

そこでガルーは一度足を止めた。同時にルースも足を止め、ガルーのほうを見る。

「…………。」

「…………。」

ガシガシと自分の髪を搔きながら横にならぶルースを睨みつけるガルー。

「なんですガルー？」

「……お前わかつてるとのか？ 集落をぬけるんだぞ？」

「そうですね。何も言わずに、しかも族長候補にもかかわらず」「

「…………。」

「しかも、名誉あるウルフヘジンの一員なのに」

まるで非難するような言葉をガルーに投げかけるルース。

「…………。」

ルースの言葉を聞きながらガルーは、顔を横に向けるルースには表情が見えないようにする。

「…まさかそれが後ろめたくて別れの言葉も言わずに集落をぬけたわけではないですよね？」

その様子を見てカンの良いルースは核心をつく。

「…だつたらわりいかよ」

その時だけチラッとだけ顔を向いて、でもすぐそっぽを向くガルー。それを見て少しばかり驚くルース。普段の彼には珍しく若干動搖している。

「…いえまさかそんな事を気にしているとは思つてもみなかつたので。私は貴方をもつと岡太い神経の人だと思つてました」

「…「つせえよ」

ガシッガシッ

ガルーは咳くようにそつ言つてから、靴底で地面をこするようにして再び歩き始めた。

「……。」

その様子に苦笑してから小走りでついていくルース。

「うして一人の青年の旅が始まった。

「それで？ 表向きは貴方が反発して集落をぬけた事にしますが、本当にとのとはどうなのですか？」

再び並ぶようにして歩きながらこの旅のきつかけを聞くルース。

「ああ？ 別にお前には関係ないだろ」

対して、ガルーは勝手について来た旅の相方に冷たく当たる。

「いいじゃないですか。しばらくは一緒に行動するんですし」

「頼んでねえ。帰れ田舎に」

「教えてくれたら街で上等の骨付き肉をおいじりますよ？」

「……」

その魔法の言葉に生睡を飲み込むガルー。

それを二口一口しながら見つめるルース。

しばらく無言のやり取りが続き、ガルーが再度生睡を飲み事で話は続いた。

「…し、仕方ねえな。教えてやるよー。」

「はいっ！」

口元をふきながらそう叫ぶガルーに笑顔で答えるルース。

だが、

「俺が集落をぬけた理由は、人探しだ」

「はい？」

ガルーの口からでた意外な一言に、ルースの笑顔が崩れた。

「人探しだ。ガキの頃に怪我をしてた俺を手当してくれた奴を探す」

「えっと？ それだけですか？」

「ああ」

あつたりと首を縦に振った目の前の青年に、若干ルースの口元が引きつる。

厳格な集落を何も言わず抜け、次の族長や名譽ある職も放棄して、やる事が『人探し』

「えっと、そんな事で集落をぬけたのですか？」

「ああ」

「次の族長候補だったのに？ 名譽あるウルフヘジンの一員だったのに？」

「そーだよ」

「…マジですか？」

完全に呆れているルースの顔を見て、ガルーは少しバツが悪くなつた。

「…仕方ないだろ。手がかりが殆どないせいで、どれだけ時間がかかるか分からなかつたんだから…」

ガルーは言ひ訳のような事を言ひて弁明する。

(おや、意外です。てっきり怒られるかと思ったのですが)

ガルーの様子に少し考え方を改めるルース。

目の前の青年の口調には普段のふてぶてしい態度がなく、心なし肩を落としているように見える。

これは少し言ひ過ぎたと反省し、詳しい話を聞くひと探りを入れた。

「ところで手がかりがないとはどうこいつ事なのですか？ 貴方なら鼻で」

「…やつをも言つたけど、随分昔で匂いをよく覚えてない。なにしろ俺が五つぐらいだつたからな」

「…なるほど」

それほど昔のことなら忘れていても仕方がない。

「…ですがそれだと手がかりは、ほほないのでは？」

ルースはそう言って隣の友人を横目でチラリと盗み見た。
肩でも落としているだらうと思つたが、そうでもなかつた。

「いや、実は匂い意外でしつかりと覚えている事がある。」

すっかりいつもどおりのふてぶてしい彼に戻つてゐる。

「ほう。なんですか？」

ルースはそれにホッとしながら相槌をついた。

「そいつは馬車に乗つていた

「ふむ」

馬車に乗つていた、それなら貴族か商人の可能性がある。

「しかも、かなり豪華な奴だ」

「ふむ」

「…やはり貴族の線が強くなつた。

「馬車には家紋がついてた」

「おおー。」

そこまで聞いてルースは驚く。意外にも確かな手がかりだ。

家紋をつけた馬車に乗るなど貴族しかいない。

しかも、家紋は貴族の身分や家名がはつきりと分かる確かなもの。

「手がかりがあるじゃないですか！ 家紋を覚えているならその貴族の名前を知っているも同然ですよー！」

「…………。」

喜ぶルースとは違いガルーの表情は暗い。しかも、笑顔のルースの顔を見ないように横を向いている。

「それで？ 一体どんな家紋だったのですか？」

「……て……い」

ルースが笑顔でそう聞くと、ガルーは呟くよつた事で答えた。

「え？ 良く聞こえなかつたのですが…」

「…覚えてない」

「はい？」

意外な一言に固まるルース。

「だから、覚えてない。もう一度見れば思い出すかもしれないけど、何せ五つの頃の記憶だしな、…曖昧すぎやん」

「…………。」

「一応、相手の髪と田の色だけはしっかりと覚えているから。後はそれを頼りに、王都にいる貴族を虱潰しに探すつもりだ」

「…………。」

絶句しているルース。

「…言つただろ？…どれほど時間がかかるかわからないつて」

そう言ってガルーは固まつたままのルースの肩を引っ張りながら歩き出した。

旅立ち（後書き）

なんとなく思いつきで書きました。

ある程度は急いで書いていき、徐々に更新が鈍足になると想います。

食堂での会話

王都から少し離れた場所にある街。

街の名はアガスト。

そこのある食堂に一人の若い男が入ってきた。

一人は丑つきの悪いチンピラの様な青年。

もう一人は作り物の人形のように整った容姿の美青年。

先に店内にいた人間は、そのチンピラと美青年の奇妙な組み合わせに驚いた。

だが、店員はさすがはというべきか、すぐに入ってきた二人の青年を空いている席に案内する。

「一」「二」注文はお決まりですか?」

少し動搖しているのかどもる店員の若い娘。

だが、それを気にしないチンピラ風の青年。さつさと品書きを読んで注文をする。

「あー、一角羊の肉を骨付きでくれ。それを五人前。んで、お前はなんにするんだルース？」

チンピラ風の青年は大食漢なのか、かなりの骨付き肉を注文した。しかも、品書きと一緒にきた美青年に渡した事から、どうやら五人前を一人で食べるつもりらしい。

「私はこの川魚とキノコの香草蒸し焼きをください。ああ、私は一人前でいいです」

そして、その事に全く気になせず自分の注文をする美青年。しかし細身の体どおりあっさりとした料理を頼んだ。

「は、はい、角羊の骨付き肉を五人前と、川魚とキノコの香草蒸し焼きを一人前ですね？ 後、お飲み物はなんになりますか？」

この奇妙な二人の青年に対し、マニュアル通りの対応で仕事をこなす店員の娘。

「俺は水でいいや

「私は石榴酒さくしゅをください」

その甲斐あってか、特に問題もなく注文をとり終わる。

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

そして、お決まりの文句を言つてから、小走りで厨房に向かう娘。

それを一人の青年は見送つてから、青年達はこれから話始めた。

店員が料理を運んでくるまで、これから事を確認する一人。

「手がかりが貴族の人間という事で、我々は人間の貴族が多く住んでいる王都に向かっているわけですね？」

「そういう事だ」

「かなり大雑把な人探しですねえ」

「仕方ねえだろ。手がかりが殆どねえんだから」

めんどくさそうにガルーはそう言って、背もたれのついた椅子にドツと体重を預けた。

集落をぬけてから数日、ずっと歩き通しだったので体力に自信ある彼も少し疲れたらしい。

「…違和感があるのですが。めんべくさがり屋の貴方が、何故こんなにも熱心なのですか？」

ガルーの様子をみたルースは、心底不思議そうに向かいの椅子に座る彼にそう質問した。

ルースが知っている彼はもう少し自堕落的だったはずだ。

間違つても「人探し」なんて時間と労力を大量に使う事などしない。なのに、そんな彼が進んで「人探し」なんて事をしようとしている。これはもしかすると、まだ彼は自分にこの旅を始めたきっかけについて重要な事を言つていかない可能性がある。

ルースはそう考へ、追い討ちをかけるようにさらに質問した。

「…もしかして、なにか深いわけでもあります？」

すると、

「…前にも言つたが、ガキの頃に怪我を治してくれたからだ」

台詞は前に聞いた通りだつたが、案の定、すこし目が泳いだ。

間違いない。彼は何か重要な事を話していない。

しかし、おかしい。

ただの人探しで、何を隠すような事があるのか？

(もしかして、探している人物に秘密が？)

ルースは考えを整理しようと、頭の中でガルーから聞いていた探し人の情報を整理する。

(ええっと、家紋付きの馬車に乗った人間で、小さい頃に怪我をしたガルーを手当した人物。そして、髪と瞳の色が、あれ？)

そう言えば、髪と瞳の色を聞いていなかつた。その前に少し衝撃的な事があつたので思考が停止して、詳しく聞くのを忘れていた。

(ああ、そう言えば性別も聞いていませんでしたね。 ん？)

そこで違和感。いや、ひらめき。

(もしかして、このガルーが探している人間って…)

チラッとガルーのほうを見ると、じちらを見ないよう必死にそっぽを向いている。

(ああ、なるほど。そういう事ですか)

その様子と、これまでの行動に、ルースはガルーの隠している事がわかつた。

「…ガルー」

「あ?」

なので、ルースはガルーをとろける様な笑みを浮かべながら声をかけた。

「私、安心しました」

「はあ? 意味がわからんねえだけ?」

いきなり、極上の笑みを浮かべて話しかけてきたルースにガルーは氣味が悪そうだった。

だが、そんなガルーの様子にお構いなしな様子のルース。ますます笑顔になる。

「私も、そして私の兄妹も心配していました。いえ、きっと貴方の集落の方々もそうでしょう」

「……?」

笑顔で話すルースと対照的に徐々に顔を歪めるガルー。彼は目の前の優男が突然なにを言い出しているのかと訳が分からぬ様子だ。

「ですが、それもいらぬ心配だった様ですね。成る程、そういう事だったのですか」

「…………。」

「ずっと、不思議でした。貴方が女性に興味を示さない事が。ですが、これで納得しました」

「…………なにが？」

そこでやっとガルーはルースに声をかけた。

すると、ルースは極上の笑みで言つた。

「どんな方なのですか？」

「…………つ。」

そのルースの満面の笑みに対して、ガルーは頬を引き攣らせて満面をつくつた。

そして、

「…ひへしょ。氣つきやがったのか

完全にふてくされた顔でルースを睨んだガルー。

「ふつふふ。当たり前でしょう。何年の付き合いだと思っているのです」

それに対しても黒い笑顔を浮かべたルース。

「…………。」

「…………。」

しばらく、沈黙が続いた後。

ガルーは根負けして、語りだした。

「…ああ、そうだよ。お前の考えている通りだよ」

「…では、やはり？」

そこでも完全にやけっぱになつたガルーは言った。

絶対に、田の前の優男には言いたくなかったことを。

「… そうだよ。ガキの頃の俺の怪我を手当してくれたのは、『女』

だ

食堂での会話（後書き）

次、過去の話の予定です。

過去

ガキの頃の俺は「やんちゃ坊主」だった。

よく親達に黙つて集落から抜け出し、野山を駆け回った。

そのたびに親や知り合いから説教をされたが、懲りずに何度も抜け出した。

なんというか、あの頃は退屈な集落の生活に飽きていたのだ。特に同年代の子どもが集落にいなかつた事が主な原因だと思う。

俺は退屈な集落を脱走しては、近くの川で魚を取つたり木の実を食べていたりした。

そんな頃だった、俺が「アイツ」に会つたのは。

きつかけは最低な状況から始まった。

幼かつた俺は、はしゃいで野山を駆け回っていた時、運悪くハンターハンターが仕掛けた罠に嵌つた。

それは大型の獣を捕まえる為に仕掛けたトラップで、「落とし穴」といわれるもの。

本来ならば、大型の獣の身動きを取れなくするだけのものだろ？が、幼い俺には奈落の穴となつた。

不意におとずれた浮遊感。そして、激痛。

俺は完全に闇に嵌つた。

不幸な事に、完全な不意打ちに受身などとれなかつた俺は、全身をしこたま穴の底に打ちつけた。

俺はしばらく、全身を襲つた激痛と落とし穴に嵌つた事に軽く呆然としていた。

何度も痛む体に鞭打つて穴をよじ登つたが、小さな体では無理だつたようで、ただ体力をすり減らしていった。

これからどうしようと徐々に焦りだした頃、穴の外から声が聞こえ始めた。

「いま、こっちでおとがしたの！ きつとびづぶつだわ！」 「本ですか？ この辺は昼間に動く獣はいないはずなのですが…」 「ぜつたいしたわ！ だつてこえが聞こえたのもの！」 「ふむ、お嬢様がそう言つならば、そうかもしれませんね。ですが、危険な獣かも知れませんから私の後ろに隠れていてくださいね？」 「うん！」

わかったわ！」

声は大人の男らしき野太い声と、甲高い少女の声。

足音が一つ、徐々にこちらに向かってくる。

そして、その足音の主達は俺が落ちた穴の近くまでやつてきた。

そして、

「たいへん！　どうぶつがおちてるわー」、「どうやらそのようですね、暗くてよく見えませんがまだ子どものようです」「ちいさいから、穴からでれないみたいだわ…」、「ハンターの回収し忘れたトラップに運悪く落ちてしまったのでしょうか」「かわいそつ…」「ふむ、でしたらお嬢様…」

男と少女が穴の傍でなにやら話していた。

だが、俺はその時何度も脱出を試みて体力が減つていて、完全にグロッキー状態。

俺はその声の主達に、威嚇の声を上garる事はできなかつた。

このまま、身動きが取れないのだと襲われる可能性がある。

なんとか立ち上がるつとあるが、足が言つ事をきかない。

「まづい、まづい」と内心かなり焦つてはいるが、穴の外からまた話し声が聞こえた。今度は少し大きな声だつた。

「お、お嬢様！ それは私が…！」 「だいじょうぶー わたしじょうぶだから！」 「お、お嬢さま」
「えいっー！」

そして、甲高い少女の掛け声が聞こえた後、俺の落ちた穴の底に、突然来訪者がやってきた。

「…」

俺はその事に全身の毛を逆立てた。

そして低く唸つて、威嚇した。

だが、

「あつー、あなた、けがしてるー」

「…」

俺の威嚇など殆ど無視して、俺に急接近した来訪者。

「だいじょうぶ？ いたくない？」

「…………。」

俺はじりじりと少女から距離を置いてするが、狭い穴の中なのですぐには追い詰められた。

「えっと、わたししゃしゃぎないよ?」

「…………。」

「あなたを手当てしたいだけなの」

「…………。」

「だから、ちょっとだけからだをさわれてくれる?」

「…………。」

俺の警戒心を解こうとしているのか、必死に俺を宥めようとしている。

だが、なかなか警戒を解こうとしない俺業を煮やした少女は、突然。

「えいっー！」

「……」

俺に覆いかぶさるよつとして俺をその小さな体で抱きしめたきた。

憔悴しきつていた俺はそれをかわす事も出来なかつた。

気がつけば、まるでぬいぐるみのよつな状態で抱っこせれていた。

そして、

「……いっぱい血がでてる。いたかつたでしょ?」

「……。」

抱っこされた状態で体のあちこちを触られて怪我の様子を調べられ、

「でも、すぐなおしてあげるからね?」

「……。」

「あのね、外にね、ギリ一いつて言う人がいるの。すっごく森に詳しい人で薬草とか沢山もつてゐるの」

「……。」

「すぐ呼ぶからまつてついてね?」

「…………。」

「ギローー！」のトしてゐたーー！　すぐ助けてー！」

穴の外に向かつて誰かを呼んだ。

すると、穴の外からひょっこりと顔を出したのは、髭を生やした厳つい顔の男。

「…自分で出られないのに、良くな込んで穴から飛び込んで行きましたな」

「えへへつ」

「…褒めてませんぞ、お嬢様」

そう言つて髭の男はため息をついた後、少女に手を伸ばして、俺を抱きかかえた少女をそのまま穴の外に出した。

そして、穴の外に出た俺は、少女に抱っこされたままギローと呼ばれた髭男に怪我の手当をされた。

髭男が、俺の体中の擦り傷にすりつぶした薬草を塗る。

これがかなり沁みる奴で、俺は俺を抱っこする少女の胸の中で暴れまくった。

これには薬を塗っていた髭男が参つて役を交代した。

つまり、俺は髭男にだっこされて、少女に薬草を塗られた。少女はなにがうれしいのか、鼻歌を歌いながら薬を塗っていたが、対して俺は最悪だった。

時折、薬を塗る手が滑って傷口に指先が当たってかなり痛い。これならおとなしく髭男に薬を塗つておけばよかつた。

最後に包帯を巻かれ治療が終わると、少女と髭男は俺から離れた。

「…できれば、あなたをおうちに連れて行きたいけど。…それはダメなの」

「…………。」

「じめんね…。できれば、あなたのけがをもつとしつかり治してあげたいんだけど」

「……お嬢様

「いりあんね……」

俺に向かつて謝る少女。

俺はそれの意味がわからなかつた。

俺はお前達に助けられた。それなのに、なぜ謝る。

謝るのは俺のほうだ。

俺は怪我の治療中に暴れてお前の手に引っかき傷を作つた。他にも最初にお前に唸つて威嚇したりもした。綺麗なドレスに土汚れをつけた。

「…………。」

俺はその事を言おうとしたが、「この姿」では驚かせるか、怯えさせるだけだと思つて何もしゃべらなかつた。

そして、何も言わない俺に向かつて少女は小さく手を振つた。

「じゃあね。バイバイ

「…達者でな、ちつここの」

そして、髭男がどこからか引いてきたでかい馬車に少女は乗った。

馬車に乗っても、窓から手を振つて別れを惜しむ少女。

「…………。」

俺は声を出さない代わりに、体の一部を必死に振つた。

「あはっー。」

それを見て、少女は笑つた。

笑えば、その容姿とあいまつて、とてもかわいかった。

俺はその顔をずっと忘れない。

何年たつても、記憶が曖昧にならうと。

絶対に忘れない。

赤い髪に、翡翠の瞳を持った心やさしい少女。

その笑顔を。

「俺は絶対に忘れなかつた」

過去（後書き）

書くのが楽しくなってきた。ノリが違います。

連投できやうなくらい楽しい。

行き詰つた別作品とは大違い。

不器用な青年

「俺は絶対に忘れなかつた」

そう言ってガルーは言葉をきつた。

すでに私達のテーブルには料理が運ばれているのだが私もガルーも料理に手を付けていない。

それは、ガルーの話がとても食事をしながら聞けるものではなかつたからだ。

話を簡単に纏めてしまえば、子どもの頃に畠に引っかかったのを助けてもらい手当してもらつただけの話だ。

だが、ガルーの一族の事を考へると少し複雑だ。

ガルーの一族は特殊で恩や義理をとても大切にするのだ。

例え、当事者が大した事をしたと思つていなくとも、「彼ら」は必ず恩義を返す。

目の前の彼は、一族の中でも変わり者だと言わわれているが、そこらへんは他の者達と変わらないようだ。

これはすばらしい事だと私は思つ。彼の美点がまた一つ見つかつた。

…だが、そんな事よりも、

「…つまつゝつまつゝ事ですね？」

「ああ？」

私はガルーが怪訝な顔をするのを見ながら、真剣な顔でいった。

「その時見た少女の笑顔が忘れられないほど可愛いいから、もう一度会いたい、と」

「ぶつじぱすぞお前」

…しまつた田が本氣だ。

「んん！ 失礼しました。えーっと、つまりは子どもの頃の恩をその一人へ返したいのですよね？」

私は気を取り直してガルーにこの旅の目的を確認した。

するとガルーは少しふてくされながらも「そーだよ」と言って、テープルの上にあつた骨付きを一つとつてかぶり付いた。

鋭い犬歯で骨についた肉を剥ぎ取つて咀嚼していくガルー。

たつた数秒で骨付き肉はただの骨になつた。

「そうだ。当時は俺もガキで恩を返そつにも力が足りなかつたが、今は違つ

「ふむ。 そうですね」

確かに子ども頃とは違い、今の彼なら恩返しに必要な力を持つている。

しかし、それならばもう少し以前に人探しをしていても良かつたはずだ。それこそ自由な十代の頃にでも。

なぜ、そろそろ次の族長を決めるこの時期に、こんな事をするのかが分からぬ。彼はその族長の候補に名前が上がつていたはずなのに。

そこまで考えて、私は気がついた。

(…ああ、そういう事ですか)

私はやつと気がついた。彼がなぜ一族で族長を決めるこの重要な時に集落を飛び出したのかを

(自信がついたって事ですか…)

名譽あるウルフヘジンの一員になり、族長候補にも名前があがつた。

ガルーは今の自分なら恩が返せると思ったのだ。つい。

だから、集落を飛び出した。

血の滲む努力をしてついた力を

戦士として使うのではなく

族長になるために使うのでもなく

恩を返すためだけに使うため、集落を出た。

私はその事に思わず笑ってしまう。

「ははっ」

「あ？ なに笑ってんだよ」

当然笑いだした私を不思議そうにみるガルー。すでにテーブルの上の骨付き肉は半分以上が骨だけになつていて。

私はその様子にせりに笑顔になつてしまひ。

「いいえ、なんでもあつませんよ」

「…突然笑い出しあたてなんでもないとか、気になるだろ」

「いや、本当になんでも」

「気になるから言え」

どうやら彼のスイッチを押してしまったようだ。仕方ない、後で怒られるのを覚悟で言おう。

「ええ、でしたらいいましょ」

「おひ、早く言え」

私はそこで一度彼の事を見た。

「……」

ぶつきら棒で、すぐ機嫌がわるくなる、チンピラの様な青年。

でも、私は知っている。

貴方が本当はどんな人なのか

不器用なガルー

貴方は本当に優しい青年だ。

「…私が笑ったのは」

そんな貴方の友人だという事が、

私は、とても嬉しい。

不器用な青年（後書き）

バトルっぽい」と書きたい。後ぐらーい話。すじく書きたい。

道中

俺達二人は昼食をすませ、街で旅に必要な保存食などを買つた後、さつさとアガストの街を出た。

王都まではあと数日は歩き続けなければならぬ。幸い、天候が安定している今ならば距離が稼げる。

王都までは人を運んでくれる大型の馬車ならアガストの街にもあつたのだが、俺達は乗らなかつた。

いや、正確には乗ることが出来ないのだ。

理由は、俺とルースは馬と相性がよくないから。

俺は馬に怯えられ、ルースは馬を弱らせる。

詳細は面倒なので言わないが、つまりそういうことだ。

下手をするに乗つてこむ馬を道中で使い物にならなくさせてしまう。

そうすると、俺達はともかく他の乗客や御者が困る。

だから、馬車に乗るのはやめて徒步で王都に向かっているのだ。

二人とも体力には自信があるので、ぐんぐんと王都への道を進んでいった。

しかし、王都までの道とは随分と危険が多いよつで、野生の獣やモ

ンスターによく遭遇した。

まあ、その殆どは俺達の胃に大人しく収まつたのだが、中には煮ても焼いても食えない奴はいる。

例えば、俺達一人の前に突然やつてきた「アレ」とかだ。

「おい！ そこの男一人つ！ 今すぐ有り金を全部寄越せ！」

「…………。」「…………。」

俺達は周りを取り囲む「そいつら」を見た。

ズタボロの服に、使い込まれた刀物、人相のよくない顔。

そんな奴らが十数人ほどで俺達を囲んでいた。

俺は先ほどの台詞と、田の前の奴らの服装を見て確信した。

「ああ、山賊か」

俺がのんびりとそう言つと、隣にいたルースが俺にこつこつと話してきた。

「いや、待つてくださいルース。山賊は山道で遭遇するものです。ですから、きっと彼らは盗賊でしょう」

確かにルースが言つとおつ周りに山は見えない。それにここは街道。

だが、

「おいおい、あんな奴らが人から者を盗めるよつた高等テクを持つているとは思えないぞ?」

俺が目の前を取り囲む山賊風の男を数人指差していった。

そいつらはいかにも頭が鈍そうだった。そんな奴らが、人の財布の抜き取りや空き巣狙いが出来るとは俺は思えない。

俺がそつやつて反論すると、ルースが少し首を傾げて山賊風の奴らを見た。

「ふむ。確かに『鈍そつ』『おつむが弱そつ』ですね

「だろ?」

俺の反論に、ルースは少し悩み始めた。

「うーん？ 確かこういった人たちの職業でぴったりのがあったような…」

「あー、俺もそれは思った」

「なんて言つんでしたっけ？」

「忘れた」

「仕方あつません。道中で思い出すとしまじょひ」

「やうだな。いい暇つぶしになるだろ」

俺とルースがそつやつてのんびり会話をしていると、当然山賊風の男達が騒ぎ出した。

「手前らつー！ 自分の立場分かつてんのかー！」 「ふざけやがつてー！」 「身包み全部はいじまえー！」 「剥いで奴隸商に売っちまおうー！」 「そうだー！」 「それがいいー！」 「片方は変態貴族に高く売れそうだ」 「そうだそうだ」

なんだか物騒な台詞が聞こえてくる。

「おい、ルース」

「はい？」

「あいつらなんで怒つてんだ？」

「あ？」

山賊風の奴らがいきなり怒り始めたので、訳が分からずルースに聞くと、こいつも理由が分からぬようだった。

「まあ、いい暇つぶしなるか」

俺はそつまつて肩に背負つた荷物を置いた。

そして、首や肩、それに指の骨をボキボキ鳴らす。

その様子を見ていた山賊風の奴らは各自の武器を取つて戦闘態勢をとる。

山賊風の奴らの武器は、殆どが鉈や棍棒だが、中にはメイジスタッフを持った魔術師っぽい奴や、小型の弓を持っている奴もいた。

対して俺は武器なし。ルースにいたっては戦う気がないようで欠伸をしている。

「どうやら俺だけがここいらとやねようだ。

…まあ、いいストレス解消になるだろ？

俺がそうやって少しボーッとしていると、小型の弓を持っていた奴が俺に向けて矢を放ってきた。

「おおひー。」

俺はそれを半歩引いてかわす。

「うあひー。」

するとかわしたと同時に、山賊風の男が鉈を持って俺に突撃してきた。

俺はそいつに向かつてテキトーに拳を振った。

「ぐえつー。？」

鉈が届くよりも先に俺の拳がそいつに顔面に届いた。

グイッ

「おひと」

俺はのけぞって倒れそうになる鉈男の襟を掴んだ。

「は後々めんべくセー。

なので、矢をうつてきた奴に向かつて俺は鉈男を思いつきつぶん投げた。

「当たつれつ……」

「あや……………」

ズドン……

「「ぐえつーー?」」

まるで砲弾のようなスピードで人間が飛び、そのまま鉈男の頭突きを腹にくらつた。男と鉈男は気を失った。

「おお、当たつた当たつた」

「 「…………。」」

俺は見事命中した事に喜び、次の標的を選ぶ。

「うーん、次は少し重い奴がいいな。あんまり軽すぎると飛びすぎてどこ飛んでくかわからん」

「 「一.？」」

俺はテキトーに体の大きそうな奴に狙いを定め、そいつに向かっていく。

だが、

カツカツカツカツ

ササツササツ

俺が歩くと、山賊風の奴らが俺を避ける。

仕方ないので一番動きの鈍そうな大男に向かっていき、そいつの襟

首を掴んだ。

「逃げんな」

「うわわわっ！」

重た的にほかよ「うじ」良べ、「弾」が大きいので的にも当てやすやつだ。

俺は襟首をつかんだまま、そいつの腰の辺りを持って持ち上げた。

すると、周囲にいた山賊風の奴らがわれ先へと逃げ出した。

俺はそいつらの中で動きの鈍そうな奴を選び、そいつに向かって「弾」を投げた。

「せーのうー！」

「アーティスト」

弾は一直線で狙つた的のほうに向かっていき、見事命中した。

そしていつの間にか、周りには山賊風の奴らの姿は俺が投げた「弾」と「的」以外は全部消えていた。

俺はその様子に、傍観を決め込んでいたルースのほうを向いて言つ

た。

「じゃ、行くか

「やうだね」

地面に置いた荷物をもつ一度背負い、俺達は旅を再開した。

王都到着。そしてギルドへ

大陸には大きく分けて、三つの国がある。

人が多く住む、パンゲア王国

妖精や亜人が多く住む、ディナ・シー公国

妖魔、悪魔が多く住む、シャイターン帝国

以上の三つだ。

シャターンは他国と仲が悪いが、パンゲアとディナ・シーの仲は良好だ。

その為どちらの国にも人や亜人が多く出入りする。

そして、人の王が治めるパンゲア王国最大都市。

王都ミドガルド。

そこに二人の青年が入っていった。

「意外にも楽だつたな…。もつと時間が掛かるかと思つた」

「最近は戦争もなくて平和ボケしてゐるんでしょう。そうでなければ私達がこんなに簡単に入れるわけがありません」

「なるほど」

ガルーとルースは街中をのんびりと歩きながら、先ほどの王都に入るときの審査について話していた。

審査は簡単で、持ち物調査と王都に何しにきたのかを質問されただけだった。

怪しいものなど何も持つていなかつた一人はただ「恩人を探しにきた」とだけ言って、門番にあつさりと通された。

「それで? ギルドってのはどいだ?」

「えーっと、門を出て真っ直ぐ行つた所に大きな看板が出でいると門番の方は言つていましたが…」

一人はそう言って親切な門番に言われた、「ギルド」と呼ばれる場

所を探している。

「いやー、それにしても随分と便利なものができたんですね。モンスター討伐から飼い猫探しまでするとは。ギルドとはなんて素晴らしいところなんでしょう。」

「単純に節操がないだけだろ」

「いいではないですか、便利なら」

「まつ、そうだな」

ギルドには様々な業種の人間が仕事を探しにやつてくる。

そして、普通の人が仕事を依頼する事も簡単に出来る。

「人を探しているならギルドに依頼すればいい」と言つ助言に従い、彼らはギルドを目指した。

「つと、ここのですね。看板もしつかりと出ています

「結構でかいな。俺のところの道場みたいだ。まあ、こつちは二階建てだが、「

そう言つて一人は普通の民家が三つは入りそうな大きな建物を見上げた。

建物には「GUILD ギルド 東都ミドガルド店」とでかでかと大きな看板が垂れ下がっていた。

それを一人は特に驚くでもなく、物怖じせずにスタスターとギルドの中に入つていった。

「すみません。仕事を依頼するにはどうすればよいのでしょうか？」
店内に入り、すぐ受付らしきものを見つけたルースは早速仕事の依頼をしようとする。

「なぜコイツが俺の依頼を頼むか」と疑問に思つたが、社交性がない自分が人に物を頼むのは難しいだろうと思い、ほうつておく事にした。

…それに

「は、はい！ どんなご依頼でしょうか！？」

：俄然はりきりだした、あの受付嬢の楽しみを奪うのは少し気が引ける。

あつ、あの受付だけ受付嬢がいつきに三人に増えたぞ。美形は得だなオイ。

「それでは探し人の特徴を教えてくださいー。」

「えーっと、ですね。赤い髪と翡翠色の瞳が特徴の貴族の令嬢です」

にこやかに答えるルース。

「ね、年齢は分かりますか？」

それと反対に顔が曇り始める受付嬢。

「えーっと、多分あそこにはいる黒い服の青年と同じくらいだと思います」

そういうて俺のほうを指差したルース。受付嬢たちがものすごい目で俺を見てきた。

(…)わっ

受付嬢たちは俺を見た後、今度はものすごく悲しそうな顔と声

で口々に、

「さ、探している方は恋人ですか?」「ち、ちがいますよね?」「違つと言つて下さい!」

と言つてルースを苦笑いさせた。

そして、ルースは苦笑いのまま「私の恋人ではありません。友人のです」と言った。

俺はそれを聞いた瞬間、受付で受付嬢相手にボケたことを言つた馬鹿の頭を叩いた。

スパーーン!

結構いい音がして、ルースがこちらを少し涙目で見てきた。

なにがいいのか、ついでに受付嬢が頬を赤くさせていく。

「…ちよつと酷くないですか」

「ボケた事いつてるからだ。さつさと依頼を頼むぞ」

俺はルースにそう言つて、受付嬢達に探し人の依頼を正式に頼んだ。

「依頼は受けてくれる人がいないといつまで掛かるか分からぬ」と言わされたので通常の1・5倍の料金で依頼した。

俺は仕事の依頼料をさっさと渡して依頼完了。

後は情報が来るまで待つだけ、それまでは街で宿を取りながら自分達でも地道に探す。

だが、その前に

「腹が減つたな。どうかで食つてくれ」

「そうですね、どこがいいでしょうか？　せつかくですから王都でしか食べれない物でも食べましょうよ」

「さつき依頼して懐がさみしい。奢ってくれ」

「まあ、いいですよ。路銀はかなりありますし」

そう言つて二人は空腹を満たすため、受付の前から玄関の方にスタート歩いていく。

すると、その様子をみた受付三人娘が受付から身を乗り出して言つた。

「あ、待つてくださいー。」「じゃ、食事ならー。」「ううでー。」
「で出来ますー。」

「ア?」「オ?」

その言葉に少し面食らいながら受付に引き返す一人。

「は？ 何こいつて飯食えるの？」

ビクッ！！！

俺がそういうと、受付三人娘がなぜか怯えた。

「JRでは食事ができるのですか?」

「はい！ そうです」

今度はルースが声をかけると、ものすく嬉しそうな声で返事をする受付三人娘。

卷之三

俺はもう何も言わない。

なにやらルースと三人娘が和気藹々と話しているが俺は無視する。

しばらく俺は意識を遠くに飛ばして辛い現実から逃げた。

「ガルー！ガルー！」

「ん？」

いつの間にかルースが俺の肩を叩いていた。

「ガルー、ガルー！ 憎いですよこは！ 食堂ビックリが、武器や

防具や簡単な薬まで取り扱っているみたいですー。」

「ふーん」

なんだか興奮した様子のルースに俺は『気のない返事をする。

「それにー、ここすぐ近くにギルドのメンバーが使える格安宿があるというのですー。」

「へー」

あの受付の三人娘に薦められたんだろう？ 知ってるよ、意識飛ばしても声は聞こえてたから。

「でも、俺達はギルドのメンバーじゃないぞ」

「ああ、それなら大丈夫です。さつきコレを貰いました」

そう言つてトランプのカードひしきものを渡してきた。

一つあって、その内一つを俺に渡してきた。

「…なんだコレ？」

それは裏にも表にも、文字も何にもない白紙のカードだった。

俺が突然渡された白紙のカードに困惑していると、ルースがにこやかに笑いながらカードについて説明し始めた。

「これですね、ギルドカードと言つてギルドに加入したギルドメンバーが持つているカードです。これは依頼を達成すると星が増えて、その数によつて色が変わるんです」

「ふーん」

俺は対して興味がなかつたので適当に相槌をうつた。

「最初は星が殆どないので白紙の様な白。それから徐々に色がついていき青、黄色、緑、赤、銀、金と豪華な色になつていくそうです」

「へー、それで？」

本当にどうでも良いつので、テキトーに会話を続けた。

「はい！ なんでも金色カードになるとギルドの施設がほぼ無料で使えるそうですね！」

「ふーん」意外としょぼいな。

「そして、都市によつては国賓待遇で迎えてくれるそうです。さら

に、王城に招かれる」ともあるとか！」

「あつ、そりやす”じー」

王城に招かれるのは凄い。確か貴族しか入れないんじやなかつたか？

「で、そんなカードを何で俺達が持つてるんだ？　俺もお前も、ギルドには加入しないはずだぞ？」

俺は白いカードをヒラヒラ振りながらルースに聞いた。

「さつきの子達が無料で作ってくれました。宿を決めていないといつたら、さつき話した格安の宿に泊まれるようのこと、とても親切にある意味予想通りの答えが返ってきた。

「…あつそ。まあ、いいや。それより食事は？」

俺は少し疲れた。早く飯を食いたい。

「ああ、二階が食堂だそうです」

「じゃ、行くか」

「はい」

俺はカードを懷こしまいながら、ルースと一緒に食堂に向かつた。

俺とルースは食堂に行き、そこで軽い食事をとった。

俺が骨付き肉を五人前と、ルースがトマトサンドを一人前。

それを完食した後、俺達はこれからのこと話を話し始めた。

「それで、ガルー。これからどうします?」

「街の酒場や食堂でしらみつぶしに情報を集める」

「ふむ、それもいいですね。しかし、それまでの宿代はどうします?」

「お前の金を使う」

「しつと言わないでください。私のお金は私のものです」

「うう」

俺は舌打ちをした。

ここまで旅費や食事代を散々たかってきただが、そろそろ限界が来
たようだ。

(仕方ない、テキトーに力仕事でもして…)

「そこで提案なのですが！」

俺はルースに金をたかる事を諦め、宿代を稼ぐ方法を考えていると、ルースの奴がテーブルに身を乗り出してきた。

「『J』はギルドです！仕事なら山ほどありますから、『J』で路銀を稼ぎましょう！」

「…………。」

ルースの言葉に、俺はめんべくさいと思いながらも、金を稼ぐならそれもありだと思った。

ギルドは色々な仕事が依頼されてきているから、きっと力仕事なんかもあることだろう。

なので俺はルースの意見を採用して、一息ついたから、一階に戻つて試しに依頼を受けに入った。

「だからっ！これは私たちが先にとったたのめよっ！」

「ふざけんなクソッ！俺たちが先だつたろっ！」

なにやら二人の男と女が白熱した言い争いをしている。一人とも完全にキレているようで今にも相手に殴りかかりそうだった。

さらに、一人とも仲間がいるようで、一人の後ろを緊迫した様子で見ている男女が数人がいた。

こちらも完全に頭に血が上っているようで、今にも武器をだしそうだ。

俺たちはそのまま遠めで眺めながら、どうするか迷っていた。

「ちょうどあいつらがいる位置に、依頼の紙が張つてあるボードがあるんだよなあ」

「そうですね」

「仕方ないから帰るか？」

「わうですね、ちゅうといはれは流血沙汰になりそうな感じです」

「じゃ帰るか。今日は酒場で情報収集して、明日またこころに来よう

「はいわうですね」

そんな事を話しながら俺たちがギルドの出口に向かった。

しかし、

「ま、待ってください……」「お、お願ひします!」「お願ひですから帰らないでっ……」

なにやらルースの奴が服の端っこを例の三人娘に掴まれて、身動きが取れなくなつた。

こいつは女の手を無理矢理振り払つたりしない奴なので、こうなると動けない。

「えーっと? お嬢さん方? 私は帰りたいのですが?」

「お願いします! もう少しだけここにいてください!」「いい、いまの軍の警備隊の方を呼んでいるのでそれまでっ……」「いてくれるだけいいですからっ! ただ、いてくれるだけでっ!」

「えーっと」

そこでチラッと俺のほうを見てくるルース。

俺は涙目の中の女に服を掴まれているルースに、手を振つて「わかったわかった」とジェスチャーをする。

しかし、警備隊の人間を待つが、いつまでたつても来る様子はなかった。

そして、田の前の口喧嘩はますます白熱していった。

俺はそれを見ながら、頭を引っ込めて喧嘩を見ていた受付二人娘に声をかけた。

「なあ、いつまでこうしてればいいんだ。お嬢さん方?」

「えっと。あ、あともう少し」

「五分前も同じ事聞いたな」

「ほ、本当にもう少しですか」

「…………。」

「えつと、えつと

俺が無言になると、三人とも萎縮してしまった。

すると、それを見ていたルースが三人に声をかけた。

「大丈夫ですよ。ちゃんと警備隊の方が来るまで待つてますからね」

「「あ、ありがとうございます……！」」

ルースの言葉に少し緊張が和らいだのか、ほっとする三人娘。

その様子に俺はため息をついた。

意外にも警備隊の人間がやつてきたのはそれからすぐの事だった。

ギルドの玄関から数人の全身鎧を着込んだ人間がドカドカと入って

きて、一番小柄な奴が受付娘の一人に事情を聞いて、すぐに喧嘩している場所に飛んでいった。

だが、喧嘩しているのは荒事専門の人間ばかりだったのか、喧嘩を収めるに大分苦労しているようだつた。

小柄な警備隊の人間が喧嘩の理由を聞こうとすると、両方のグループから違つた意見が出てなかなか騒ぎが收まらない。

仕方ないので、警備隊の人間がグループのリーダーを一人だけ警備隊の詰め所まで連行する事で話がついた。

だが、それを一人のリーダーのグループの人間達は不服だったようで、その警備隊の人間に對して軽い暴力を振るつた。

「なんで内のリーダーが連れていかれなきやいけないんだよつ！悪いのはあいつらだろつ！」

比較的メンバーの中で若い男が警備隊の人間の胸倉を掴んだ。

「おい！ お前その手を離せつ！」

それを見た他の警備隊の人間が慌てて若い男を取り押さえようとする。

徐々に場は混乱していき、このままでは怪我人が出そうな勢いだ。

さすがに田の前で怪我人が出るのは気分が悪いと思い、俺は騒ぎの中心に向かった。

「ちよっと、行つてくれる。荷物は頼んだ」

「わかりました。気をつけて」

ルースに荷物を預け、俺は肩の骨を鳴らして歩いていく。

「おい、アンタ

「ああー!？」

近くにいたグループの一人の肩を叩く

そして、

「邪魔だ」

ガツ！

手のひらでそいつの顔面を叩いた。

平手というよりは掌底氣味だつたのでそいつは脳を揺さぶられて、あつたりと氣を失つて倒れた。

メンバーの一人が倒れた事で、全員の意識がこちらに向くかと思つたが、頭に血が上つているのか、数人しか俺の方を見なかつた。

「ああ！？ 何だコイツっ！」

「ユルの奴が倒れてるぞっ！」

一人の男が倒れた奴に気づいて、俺のほうを見た。

頭に血が上つた奴と会話するのは面倒なので、手で「来い来い」と挑発する。

「なめやがつてつ…！」

「ぶつ殺すっ！」

すると、簡単に誘いに乗ってきてくる一人。

俺はお礼に平手と裏拳で一人を仲良く床に寝させてやつた。

「残りは五人か」

グループは二つあわせての計八人のメンバーだつたから、あと五人を眠らせればこの騒ぎは収まるだろう。

メンバーの中には女もいたから顔と腹を攻撃するときは気をつけよう。

俺はそんな甘い事を考えながら、しり込みし始めたグループのメンバーを一人づつ氣絶させていった。

最後に二つのグループのリーダーをチョップで沈めると騒ぎは完全に収まった。

幸い怪我人は殆どいなかつたようだが、胸倉を掴まれていた小柄な警備隊の人間は少し殴られていたのか、被つていた兜が少し脱げて床に座り込んでいた。

俺はそいつの傍まで近づいて、大丈夫か声をかけようとした。

だが、そこで妙な違和感を覚えた。

「ん……？」

まず、目の前の警備隊の隊員の体が小柄すぎる。

次に、小柄なわりに妙に丸っこい。

最後に、ずれた兜から「真っ赤」な髪の毛が見えた。

まさか、と思った。

そんな馬鹿な、と。

「つ……！」

思わず、俺はその隊員の兜をひつぺがした。

「あつ……！」

兜を外すと、男にしてキメの細かい肌と、女っぽい丸びを帯びた綺麗な顔立ちが出てきた。

鎧を着込んでいるし、髪が短いので違和感があるが、間違いない。

『女』だ。

そして、俺はこの女に見覚えがあった。

成長しているが面影がある。

特に、俺のことを丸く見て見ゆる『黒縁の瞳』だ。

「…見つけた

俺は確信する。

田の前の隊員は、間違いなくあの時の少女だと。

「俺の事覚えてるかっ！？」

田の前の鎧を着込んだ少女の肩を掴んで、叫ぶように俺は言った。正直、こんな所でのときの少女に会えると思わなかつた俺はかなり興奮した。

まわりの状況などお構いなしに少女の肩を掴んで早口でまくし立てた。

「覚えてるか？ 十年以上前の事だけど、俺は森でアンタに助けられたんだ！」

「えっ？ も、森で？ 貴方を助けた？」

しかし、突然の事についていけない少女は困惑していた。

だが、俺はそんなこと無視して、俺がここに来た理由を田の前の少女に話した。

「そうだ！ 森で俺はアンタに助けられたんだ！ 俺はその時の恩を返したい！ 何か願いはないか？ 何でも言つてくれ！ 必ず叶えてやるー！」

目の前の少女に向かつて力強い声で、そう宣言した。

言葉に嘘はない。

俺はこの少女に恩を返すためになんでもするつもりだった。

俺は少女の返事を待つた。

私は動搖していた。

目の前の男性が、喧嘩していたギルドのメンバーを素手で次々と気絶させた事もそうだが、いきなり自分の被ってきた兜をとった事にも驚いた。

そして、なによりも驚いたのは、先ほどの言葉だ。

なんでも自分が目の前の男性を十年以上前に助けた恩人で、目の前の彼はその恩を私に返したいらしい。

胡散臭い話だと思つ。

実際、私には森で人を助けた記憶などないし、目の前の男性にも見えがない。

だが、目の前の男性の言葉に込められた重みは、嘘だとは思えなかつた。

だから、だろう。

私は思わず、自分が叶えたい「願い」を言ってしまった。

「…没落しかけの我が家を復興させたい」

「叶える」

俺は少女の願いに即答した。

「え？」

だが、少女は俺の言葉が良く聞こえなかつたようだ。

だから、もう一度言つた。

「時間はかかるかもしない。だが、絶対叶えてやる」

「…………。」

もう一度言ったが、今度は沈黙してしまった。

また聞こえなかつたのかと思つて、再度少女に言葉をかけようとしたが、

「嘘じやない。俺は」

「スパンツ！」

頬に衝撃。

目の前には手を振り切つた少女。いつのまにか、俺は少女の肩から手を離していた。

状況から察するに、俺は少女にビンタされたらしい。

俺が叩かれた状態で目を丸くしていると、少女が叫んだ。

「貴方、最低っ……！」

そう言って、少女は肩を怒らせて俺の前から消えて行つた。

残つたのは周りで氣絶したまんまのギルドメンバーと、野次馬と警備隊の人間。

野次馬と警備隊の奴らからは、なぜか氣の毒そうな目で見られていた。

だが、そんな事どうだつていい。

俺が興味があるのは一つだけだ。

俺は少女が消えて行つた場所に、急いで走つた行つた。

叫び

「なあ、待つてくれよー。」

「…………。」

俺は前を歩く鎧を着た少女の背中に声をかけた。

その少女は先ほど俺の頬を張った、あの少女だ。

俺は頬を張られた後、ギルドを飛び出した少女を追い、街中を肩を怒らせながら歩く少女を見つけた。

そして、今俺はなんとかこの少女と話をするために少女の後ろから声をかけ続けた。

「どうして怒つてんだ？　俺が何か気に障ることでも言つたか？」

「…………。」

返事は全く返つてこないが、それでもこの少女となにか会話をするために一方的な会話を続けた。

「まさか、やつきの俺の言葉が冗談だとも思つたのか？　だつたらそれは違つぞ、俺は本氣で。」

「…………。」

少女が突然立ち止まり、振り向きながら「ひかりをものす」とい形相で睨んできた。

「…？」

俺はその顔を見て驚いた。

明らかに殺氣を含んだ目で俺のことを睨んでいたからだ。

この少女にそんな目で睨まれた事にショックを受け、俺は呆然としてしまった。

そして、そんな俺に少女は冷たく言葉を投げかけた。

「…どこで私の話を聞いたのかわからないけど、からかうなら他を当たつてくれない？…確かに馬鹿な事かも知れないけど、私は真剣なのよっ！」

前半は怒りを押し込めた声で、そして後半はその押さえた怒りが爆発したかのような声で、俺に言葉をぶつけて来た。

なにやら、俺が自分をからかって遊んでいると思つてこようだ。

だが、俺にはそんなつもりは全くない。この少女が何を勘違いしているのかわからないが、俺の目的は一つだけだ。

少女の誤解を解こうと思つたが、俺は呆然として、何も言葉を返す事ができない。

だが、

「…もう十分満足でしょ？　もう、放つておいてよ…」

怒りか、悲しみか、もしくは、その両方で肩を震わせる少女を見たとき、俺は言葉を口にできるようになった。

「…たすけてやる」

「えつ？」

俺は肩を震わせる少女に近づき、上から少女の頭を見下す形で話しかけた。

「俺がお前を助けてやる」

「ま、また！　わ、私をからかって…！」

少女は俺が突然言った言葉に怒り出した。やはり、俺の事を自分をからかって遊んでいる奴に見えていたらしい。

俺はいい加減それにキレた。

「からかってなんかいねえよ！　俺は本気でアンタに恩を返しに来たんだよッ！」

「…？」

少女は突然キレた俺に驚いたようだが、俺は構わずまくし立てた。

「さつき、アンタはギルドで言ったよな！『没落しけの我が家を復興させたい』って！」

「え、ええ」

「つまり、困ってるんだろ！助けて欲しいんだろ！だったら俺に命令しろよ！『助けてくれ』って言えよ！俺は絶対にそれを叶えてやるから…だから言え…そして…」

俺はそこで俺の事をポカーンとして見上げる少女に向かつて、最後に叫んだ。

「俺に恩を返せやせり…」

『俺に恩を返せやしない。』

俺が大声で叫ぶと少女は身を竦ませ、目を丸くして俺の事を見た。

「わ、私は」

「えつーと、君達？ 白昼の人通りの多い街中でこれ以上はちょっとやめたほうがよくないですか？」

「……？」

そして、少女が何かを言おうとしたといいで、途中で邪魔が入った。声のした方を見れば、そこにいたのはギルドに置いてきた俺の旅の相方だった。

そいつは俺の荷物と自分の荷物を両手に持つた、酷く間抜けな姿で俺達のことを見ていた。

だが、よく考えると間抜けなのは俺のほうかもしれない。

白昼堂々と、街中で少女に向かつて熱く叫ぶ男。正直、自分のことじやなかつたら見た瞬間に爆笑するか呆れているかのどちらかだつただろう。

俺はその事に気がつき、顔を少しひくついた。

だが、そこは何とか語られないよつて低い声を出しつづけました。

「ああ？ なんだよお前、なんでここにいるんだよ？」

「貴方達を心配で追つてきたんですよ。意外にも簡単に見つかってよかったです。真昼間から喧嘩している男女が騒いでいると、街の人たちが話していたのでその騒ぎの場所に行つてみたら、案の定でした。」

「……くわッ」

俺は小さく叩打ちした。

だが、ここでのことは今はどうだつていい。

俺は話の続きをするために少女のほうに振り返った。

「おー、せつときの話の続きだけど」

「おーと、ガルーそれはちょっと場所を変えましょ」

「あ？ 何でそんな事？」

少女と話の続きをしようとした所でまた邪魔が入り、俺はルースに文句を言おうとしたが、

「…周りを見てください」

「ん？」

ルースの言葉に、俺はおもわず周りを見回した。

すると、いるわいるわ。人が俺達三人を囲むようにぐるっと丸く人垣を作っていた。

俺はそれに小さく舌打ちをした。

「くそつ

「まあ、そういうことです。そこのお嬢さんと話の続きをしたいなら場所を変えましょ」

「…わーつたよ。…おい、ちょっと悪いが場所を変えるぞ」

俺はルースの言葉にしぶしぶ頷き、少女に話の場所を変えるために声をかけた。

声をかけると、少女は何故か少しボーッとしていた、

「…おい。アンタ話聞いてたか？」

少女の視線を追つてみると、その先にはルース。どうやら、ルースの顔を見て顔を赤くしていたようだ。

俺はそれに少し呆れながら、「…行くぞ」と言いながら無理矢理手を引いて、適当に話が出来る場所を探した。

身の上話

パンゲア王国第十六警備隊に所属する一般隊員。

テレサ＝ハウスローゼン。

それが私だ。

いきなりだけど、私の家は没落しかけている。

私の父は一つの町を治める男爵だ。

父が男爵という事で昔はそこそこ裕福な暮らしをしていましたが、今はとても質素な暮らしをしている。

ほとんど街に住む平民と同じような暮らしだ。でもこれは別に父が商売に失敗したとか屋敷の金を散財したとかじゃない。

すべてではモンスターのせい。

数年前に大量発生したあいつらのせいでの畑や農園が荒らされ、領民の多くが犠牲になってしまった。

幸い、すぐに王国の正規軍が討伐に来てくれてモンスターは大方駆逐できただけど、町には大きな被害が出た。

作物はほぼ全滅、貴重な働き手である男性達は家族を守るために戦つて大勢死んでしまった。

これにより町の復興が王国からの援助金だけではだいぶ困難になってしまった。

父も資金繰りには頑張ったのだけど、町の復興は程遠かった。

街の復興資金も、領民の食料費も、お金がかなりかかる。

それでも父は諦めずに町の復興に尽力し続けた。

屋敷にあった金田の物を全て売つて領民に食料を配つたことだってある。

領民はそんな父に感謝して、辛い生活にも耐えてくれた。

そして町が壊滅的な打撃受けてから数年後、町は徐々に活気を取り戻していった。

荒らされた畠や農園も元のように戻り、町の復興に伴つて新しい住民も増えた。

「これですべてが元に戻つた」と私は安心していた。

だが、意外な落とし穴があつた。

借金だ。

父は町の復興を急ぐあまり、色々なところから借金をしていた。

その額はすでに金目の物は売りつくした我が家ではすぐに返せる額ではなく、徐々に借金の額は上がつていった。

そのことで父は毎晩のように悩んでいた。

王国からの援助金はまだ届くが、それを自分達の借金を返すために使うわけにはいかない。

復興しかけている町の住民に突然税の引き上げを言うのは少し酷だ。

かといって借金を返すため新しい事業を始める資金も人材も材料もない。

だが、何もしないと我が家は借金で没落してしまう。

そうなつては我が家は没落。長年つかえてくれた使用人達も路頭に迷ってしまう。

それだけは避けなくてはいけないと私は思い、私は借金が少しでも減らせるように王都で働く事にした。

幸い、昔から体を動かす事は好きだったし護身の為に剣術も少しだが習っていた。

父は反対したが、私は体さえあればどんな人でも入隊を許可してくれる王都警備隊に十六歳の時に入隊した。

そして、入隊して二年。

本当に少しづつだが我が家の借金も少しづつ減っていき、このまま順調にいけば、あと五年ほどで借金はなくなるはずだ。

こんな話を私は田の前の黒ずくめの青年に話してしまった。

黒ずくめの青年の名前はガルーというらしい。

なんでもガルーは過去に私に助けられたことがあるらしい。

でも、私は全く覚えていない。

その事はガルーに話しけど、ガルーは「アンタで間違いない」といつて譲らなかつた。

さらにガルーは真剣な顔で「それでギルドでアンタから聞いた『家を復興させたい』ってどういう事なんだ?」と言つて、

私がいまどういう状況なのかを詳しく聞いてきた。

そんなガルーに私は威圧されてしまい、すべて話してしまった。

正直、ここまで全てを話すつもりはなかつたのだが気がつけば全て話していた。

多分日頃のストレスがたまっていた証拠だらう。

だけど、おかげで少しすつきりした。

最近では私の家の噂を聞いてちょつかいを出してくる人が出てきて嫌気が差していたのだ。実は最初はガルーのことこの手の人だと

思っていた。

でも、それは勘違いだった。

先ほど街中で聞いたガルーの言葉。

アレは本物だった。

強い意志の籠つた声に、むき出しの感情。

勘違いしていた私に怒り、自分の強い感情をぶつけてきたガルー。

あの言葉に嘘はない。

私は自信を持つてそう言える。

だって、私を見下ろしていたガルーの顔を、私は目の前で見ていたから。

その時のガルーの顔は、自分の言っている言葉を信じて貰えなかつた子供の顔だった。

どうすれば信じて貰えるのか頭を悩ませるのだけれど、上手く言葉

にできないもどかしい。

自分を信じてくれない悲しさと悔しさ、相手に対するビビリよりも
ない怒り。

それらが混ざり合った複雑な表情。

困ったような、泣き出してしまう、複雑な感情が全部詰まつ
たその顔。

本当に、「今にも泣き出すのでは?」と思つたほどガルーの顔は悲
しそうだった。

私をからかうのが目的ならば、私に向かつてあんなに大声で叫ぶは
ずがない。

あんな泣きそうな顔で私を見るはずがない。

むき出しの感情をぶつけで叫び、泣きそうな顔で私を見るガルー。

まるで、幼い子どもよつて自分の感情をむき出しにするガルー。

不器用なガルー。

なんというか、：私が彼の言葉を信じた大きな理由はそこにある。

つまり、

こんな不器用な人が、嘘をついて人を騙せるとは思わなかつたからだ。

余談だが、

街中で言い争いをしていたガルーと私を諫めてくれた「ルース」さんと言う銀髪の男性がガルーについて詳しく説明してくれた。

驚く事に、このガルーという青年。

私に恩を返すためだけに住んでいた村を『夜逃げ』してきたらしいのだ。

なんでもガルーは住んでいた村の中ではなかなか優秀な青年で、村の名誉職にもついていたらしい。

でも、彼本人はそんな事に興味はなく、「そろそろ力がついた」と自分に自信がつくと夜中に村を抜け出して、昔の恩人を探しに旅に出たらしい。

私はそれを聞いて開いた口が塞がらなかつた。

自分も結構な行動派だと思つていたが、上には上がいた。

昔の恩人を探しに、職も村も捨てて旅に出るなんて聞いたことがない。

さらに、ルースさんが「ちなみにガルーは貴方の目と髪の色ぐらいしか覚えていませんでした」と言つたのを聞いて、私はもう頭を抱えてしまつた。

…馬鹿だ。大馬鹿がいる。

そんな曖昧な特徴だけで村を夜逃げして、旅をしてきたのか。

私は少しルースさんを同情的な目で見てしまつた。

きっと、彼は無理矢理旅に同行させられたのだろう。なんて不憫な人だろう。

まあ、この話を聞いてから余計に私はガルーが「悪人」ではないと確信するわけだが、それにしてもどういう人間なのだろう、このガルーという青年は。

金稼ぎ

テレサと名乗つた俺の恩人の身の上話をすべて聞いてから、俺は席を立つた。

俺が席を立つたのを見てテレサとなぜか一緒に話を聞いていたルースの野郎も俺のほうを見た。

二人は俺が席を立つたことに不思議そうに見ていたが、俺はこれからしなければならない事ができたので一言だけ言葉を残して一人に背を向けて店を出た。

ちなみに、一人に言ったのはこんな言葉だ。

「金稼ぎに行って来る」

ガルーが『金稼ぎに行つてくる』という言葉を残して店を出た後、ルースとテレサは顔を見合させて話し始めた。

「…あの、ルースさんでしたっけ？　あなたの名前は」

「はい、そうです」

「その一、ルースさんに聞きたいんですけど。…まさかあの人、私が借金の返済で困つてるって言ったから、あんなことを言ったんでしょうが？」

「はい、その通りです。」

「…あの人は馬鹿なんですか？」

「ああ、あなたもそう思います？　実は私もです。」

「…………。」

「まあ、そもそもですね。あのガルーと言ひ男は」

ルースはそう言つて、ガルーについて色々とテレサに情報を吹き込んだ。

そして、ルースの話を聞いたテレサはいくつのこと理解した。

それは、

ガルーと言つあの青年がものすごい馬鹿だという事と、ルースと言うこの青年が意外におしゃべりだという事だ。

場所は変わり、ギルドの依頼ボードの前。

つい先ほどまで騒ぎがあつた場所だが、今はその様子もなく人もまばらだった。

依頼ボードの前には数人のギルドメンバーが依頼ボードに張られた依頼書を吟味するように見ているだけで、もついつも通りのギルドに戻っていた。

：だが、その戻った平穏を壊す青年が現れた。

その青年は依頼ボードの張られた『討伐依頼』の依頼書を一枚一枚奪い取るように引き剥がし、受付へ向かい、そのすべての依頼を請けようとした。

だが、そんな無茶な仕事の請け方は受付が認めるわけがなく散々もめた。

しかし、最後には受付のほうが折れ、そいつはその大量の討伐依頼の仕事を請けることになった。

ちなみに、依頼書の内容はこのようなものだ。

『紅狼を10匹討伐』『食人植物の群生の討伐』『岩トカゲ3匹討伐』『二股蛇を2匹討伐』『角熊を1匹討伐』

依頼書の共通点は、すべてが中級のモンスターの討伐依頼で、そのすべてのモンスター達の生息地地帯が王都から少し離れた場所にある深い森だった。

そして、その一つ一つの依頼難度が高く、黄色から緑色のギルドカードを持つている人間が請けるような、中々に難易度の高い依頼だった。

普通ならばこの様な依頼は、ギルドの中で戦闘に特化した人間でしつかりパーティを組み、準備を整えてから望む。

だが、そいつはそんな事をするそぶりは一切せずに、買い物に行くような気軽さでモンスターの討伐に向かった。

ギルドにいた人間はその姿を見て「田舎から出てきた若造が調子にのつている」と思っていたが、次の日からその評価を改

める事になる。

翌朝、ギルドの前にあの黒ずくめの青年が現れた。

手には、いくつものモンスターの「首」を持って。

おそらく彼が、その手に持ったモンスター達を討伐してきたのだろう。

だが、そのわりに青年には怪我もなく、また疲れた様子もなかつた。

それどころか、青年は実にめんどうな仕草で受付のカウンターに複数のモンスターの首を置き、依頼が終わった事を報告した。

まわりがその様子に驚く中、青年はさつと依頼達成の手続きをした後、報酬金50万をもらいすぐどこかに消えた。

この日から、その青年はギルドの中で特に注目される「ハンター」となった。

金稼ぎ（後書き）

感想が増えてきてとても嬉しいです。
これからも更新頑張ります。

「は？ 何言つてんのお前？」

ガルーは田の前のトレサに向かってそう叫つた。

「え？ だつて、これは恩返しなんじようへ。」

「いんや、せりふ」

それに対し、トレサのまづまづとした感つた。

「……じや、じのね金つてなーっ。」

「お前が借金に困つてたみたいだから、その手助けだ」

「あの、だからわれが恩返しなんじや……」

「ちがうだよ」

ガルーは乱暴にしゃづきつて、しつじく質問を繰り返すトレサの言葉を聞きついた。

「…………。」

それにトレサは少しショックとなる。

「……あー。」

ガルーはそんなテレサを見て「しまった」と思った。

不機嫌にさせてしまった事に気がつき、なんとか機嫌を直してもらおうと色々頭をめぐらせる。

だが、そういったことに疎いガルーは上手く言葉がでない。

苦し紛れに、テレサが先ほど自分に聞いていた質問の答えを返すことにした。

「俺がお前に金を渡す事に恩返しの意味はねえよ」

「…意味がわからない。あなたは私の借金の話を聞いて、それを返すことを恩返しの目的にしたんでしょう？」

「あ？ 全然違つや。だつて、これは」

テレサの言葉を否定するガルーの口にふざけた様子はなかつた。

だから、続けて言つたガルーの言葉は本氣だった。

ガルーは格好をつけるでもなく、じく自然にじつ言つた。

「俺が勝手にしていることだろ？」

「…え？と、つまりこういう事？ 私の借金の返済を手伝ってくれるけど、それに恩返しの意味はないと？」

「まあ、そうだ」

「…………。」

ガルーの「それがどうした？」といわんばかりの顔を見て頭を抱えそうになつた。

正直、渡されたお金を受け取るのにかなりの葛藤もあつたりもしたのだが、ガルーの行動の意味を理解したら、そんなものは吹き飛んでしまつた。

突然、警備隊の屯所に来てお金の入つた袋を渡したと思つたらコレだ。

前日のアレがあつたので、なんとなく来るだろ？と思つていた。

だから、お金をありがたくもらい感謝の言葉に「恩返しありがとう。でも、もう気持ちだけで十分だから」と言つたら、コレだ。

なんだか、全部を台無しにされたような気分だつた。

「テレサ」

「…なによ

私がなんだかぐったり疲れていると、ガルーが一いちに手を出して何かを渡してくれる。

「口へ渡しておく。必要なとき吹け」

そう言ってガルーが渡してきたのは銀色の笛だった。

私はそれを素直に受け取った。

もひ、正直な所やけくそがみだつたのだひ。

受け取つてから改めて笛を見た。

笛は銀色で細長く、手のひらに乗るような小さなものだった。

銀色の笛には細かい意匠が施されていて、まるでアクセサリーのようにも見えた。

さうして、首から下げられるよう丁寧に紐が通つてゐる。

(あやか、プレゼントー?)

「あ、あのいれって

おもわず、田の前の男との綺麗な笛を見比べる。

「危ないときか、なんか問題があつたときに思いつたり吹け」

「え？」

「じゃ、また来る」

私がガルーにこの笛を渡した意味を聞こうとしたら、ガルーはそんな事を言つて屯所から出て行つてしまつた。

私はこの時かなり動搖して、ガルーを追いかけことができなかつた
初めて家族以外の男性からプレゼント渡された。

そのことが思つたよりも恥ずかしくて、思つていたよりずっと嬉しかつた。

なんだか、そのままガルー追いかけたらとんでもない事になりそうだ。

だから、私はガルーを追いかけるのを諦めて、渡された笛を見ながら今度ガルーに会つたときに言つ台詞を考える事にした。

男 一人の会話（前書き）

かなり短いです。

男一人の会話

「とりあえず、これから俺は稼ぎするぞ。あいつが言つてた『家を復興させたい』つてのは借金があつたらできないからな」

「……借金を返せば、それが恩返しになるのでは？」

「マイナスからゼロに戻したって恩返しにならないだろ。『自分は幸せ』というくらいにプラスにしなくちゃ恩返しの意味がない」

「…す」ですね。恩人の借金を返して『恩返し』にしないとは…」

「？ 恩人が困ってるならそれを助けるのは当たり前だろ？」

「…いや、本当にす」いです。特にそれを真顔でいつあたりが

「意味わかんねえ。別に普通のことをしてるだけだろ」

「…そうですね。…はい、その通りです」

「??」

なんだか歯切れの悪い会話をするルースにガルーは違和感を覚える。

だが、目の前の男の行動を考えるのは過去の経験から無駄だと知っているので、気にしないことにした。

「まあ、そんなことはどうだつていい。……ただ、お前に一ついいた
いことがあるんだ」

「……なんですか？」

「さつわと家帰れ」

「…………。」

「別にお前は俺の恩返しに付き合ひ義理なんかないだろ？」王都で
土産でも買つて、さつわと自分の領地に帰れ」

「……んー、それはちよつとお断りします」

「……なんでだよ」

「いやー、長年の友のあんな面白い姿を見てしまつたら、このまま
帰るのは人生の楽しみを減らしてしまつようで勿体無くて、とても
とても」

「…………この野郎」

「なので、是非今後もあなた達一人の様子を見守らせてもらいたく
……」

「ふざけんな。帰れ。いや、やっぱ死ね

俺はルースの言葉を途中で斬つて、奴にむかって暴言を吐いた。

「いいじゃないですか。別に減るものでもないでしょ」

だが、奴は全く堪えている様子はない。

それどころか、実際に楽しそうに俺の事を見ていやがる。

さすがその様子には少しムカついた。なので、ひょっとだけ脅してみた。

「いや、マジでふざけんなよ？ …お前どうせ俺の今の状況を見て楽しんでるだけだろ？」

「まあ、ぶっちゃけそうですが、それがなにか？」

「……………。」

俺の脅しありにいつには全く効果がなかった。

寧ろ奴を調子にのせてしまったようだ。

……なんてこいつか。

昔からやるのと黙っていたけど、今日は本気でやりますか
と思つた。

この日の朝、ちゃんと起きつてやりたい。

男一人の会話（後書き）

ルースにはとことん酷いガルーです。

基本ガルーが優しいのは恩人であるテレサだけ。

あー、そろそろガルーの本気を少し書きたいです。

そろそろ、モンスターの討伐依頼以外もやってみたくなってきた。

理由は、単純に興味があつたからだ。

依頼ボードにはモンスターの討伐以外にも様々な依頼があり、俺の好奇心をとても刺激する。

別に、金を稼ぐのにモンスターの討伐が一番効率だろは思つていない。

だ、だから、色々な依頼をこなして一番効率のいいものを探してみるために、ちょっとそういうものをやつてみるのもいい

いんじやないかと思う。うん。

まあ、そんなわけで改めて依頼ボードの依頼を色々と吟味してみた。

そして、結論。

「…モンスター殺してるほうが楽だ」

普通の人間が聞けば目をむきそつた台詞をため息をつきながら言つガルー。

「金持ちの護衛とか、俺には絶対無理だな。つーか、やりたくないえ」

「はあー」ともう一度ため息をつきながら、諦めてモンスターの討

伐依頼を探そうとしたところで、

「ん？」

ガルーは少し変わった依頼書を見つけた。

その依頼書は普通の依頼書のように細かい仕事ないようが書いているわけではなく、実に簡単な内容が書き込まれていた。

『赤鬼バッカス。懸賞金100万。生死問わず。』

「何だコレ？ 人探しか？ だけど、生死問わず？」

ガルー気になつたので、受付の三人娘に聞いてみる事にした。

受付に行って、あの依頼書について聞いてみたら、

俺は三人娘に珍獣を見るような目で見られた。

「…えっと、あれは賞金首ですか？」

「賞金首?」

「ようある元、悪い」とした悪人です」

「ふーん」

「そこに書かれている額は、そこに書かれている人物を捕まえてきた時にもらえるお金の金額です。」

「へー、だったら「イツ捕まえるだけで50万ももらえるのか」

「やつこいつ」とです

「面白そうだな」

「…もしかして、あの賞金首を狙つてます?」

「ちょっとだけな」

「止めておいたほうがいいですよ? あの賞金首は最近また危険度が上がって、賞金もその分だけ上がるって話です」

「…つまり、金額が値上がりするまで待つて事か?」

「危険だから止めておけって言つてるんですけど…」

いきなりキレた受付娘にちょっと驚く。

「お、おい何キレて……」

「いいですか！？ あなたは確かに強いかもしないんですけど、モンスターを狩るとコレは全く別ですからね！ このバッカスっていうのは王都の近くを通る行商や貴族狙う山賊の棟梁で、すごく強いんですから！ 知能の低いモンスターを狩るとは訳が違うんですね！ 山賊の一昧には魔術師も居るって話ですし、本人だって『赤鬼』って呼ばれる大男で、ゴブリンが使うような大きな棍棒を使って人をバツタバツタと」

「あ？」

ちょっと、待て。今なんて言った。

赤鬼？ ゴブリンみたいな棍棒？

…なんだか、凄く覚えのあるフレーズの連呼だ。

俺はまさか、と思って、キレてる受付の娘にちょっと聞いてみた。

「…なあ、バッカスって奴。もしかして、傭兵くずれだつたりしないか？」

すると、受付娘が眉を顰めながら、

「…よく知つてますね。そうです。バッカスは昔は傭兵だったそうですが、今はすっかり落ちぶれて山賊になつてますよ

と、答えた。

俺はそれを聞いて確信した。

「…あー」

間違いない『あいつ』だ。

俺は思わず笑ってしまった。

そして俺は、顔が笑つたまま受付娘にこんな質問した。

「なあ、そのバッカスって山賊、最後にビコラ辺に出没したかわかるか？」

「？まあ、少し時間がかかるかも知れませんが調べる事は可能ですが、…まさかまだ狙ってるんですか？」

俺の質問を聞いた受付娘は、少し落ち着きを取り戻した。…まだ少し怒っているようだが。

だけど、今はそんなことはどうだつていい。

それよりも、面白い事になつてきた。

「…なあ、山賊ってことは結構金を溜め込んでるはずだよな？」

俺がそういうと、受付娘は不思議そうに

「…まあ、被害総額はかなりのものですから、それなりには「ほこ」と言った。

(よつしゃつー)

俺はそれを聞いて思わず拳を握り締める。

俺は勢いよくさりげに聞いた。

「その金つて、山賊捕まえた後どうなる？ 俺こもりえるのか？」

「…全額はさすがに無理でしそうが、お礼に少しへりこはもらえるんじやないですか？」

どこのかなげやうな受付娘の答えを聞いて俺はますます拳を握り締める。

そして、

「なあ、その山賊がよく出没する場所を通りたい商人とかいないか？」

「それは沢山いますよ？ でも、みんなその山賊が怖くて…」

俺はその台詞が終わるか終わらないかの内にこんな事を頼んだ。

「だったら、どうしてもここを通りたい奴らの護衛。俺こさせてくれ

この俺の頼みは受付娘に少し眉をしかめられたが、結果として話しあは通った。

そして、次の日の朝から俺は。

山賊がよく出没する危険な街道を通る商人達の、「護衛」をすることがとなつた。

賞金首（後書き）

次で多分ガルーが戦います。

この小説のお気に入り登録が増えました。
登録してくださった方々ありがとうございます。これからも頑張ります。

あと、なにか感想とかがあれば気軽にどうぞ。

山賊

護衛というのは実に暇な仕事だと思った。

商人が乗る荷馬車に乗つて山賊が出てくるまでただ待つているだけだ。

これだけで金をもらつてしているのは殆ど詐欺に近いと、この仕事やつていてつねづね思った。

だが、そんな詐欺みたいな仕事にもかかわらず、商人たちは喜んで俺に護衛の仕事を頼んだ。

まあ、その理由は俺の護衛料が大分安いからだつ。

俺は普通の護衛料の半分しかもらわない。

まあ、その理由は色々ある。

例えば、俺が馬を怯えさせてしまうからだとか。

実は、商人を山賊を捕まえるための餌にしているからだとか、理由はいろいろだ。

最初は料金が安すぎて胡散臭く思われていたが、何度目かの護衛をしたときに狼の群れに遭遇してから状況が変わった。

その時、俺はちょうど荷馬車の中で寝ていて、そのキヤンキヤンうるさい声に苛立つて起きてしまった。

最悪の起こし方をされた俺は完全にキレしていく、荷馬車を追いかけ
る狼の群れを見て思わずこんな感じで叫んでしまった。

「うるさいんだよつ！ キヤンキヤン、キヤンキヤン吼えやがつ
て！ ぶつ殺すぞつ……！」

その瞬間、狼達は文字通り尻尾を巻いて逃げていった。

それを見ていた商人がこの話を仲間の商人たちに話して、俺の護衛
の仕事は増えていった。

だが、仕事が増えても山賊の一昧は全く現れなくて、たまに現れる
山賊とは関係ない野犬や低位のモンスターの駆除をいつもしていた。

しかし、そんな退屈な日々が一週間ほど続いたある日。

やつと、山賊が現れた。

俺が護衛していた馬車をいつの間にか囲んだ馬に乗った荒くれ者達。

ボロ布の様な服を着て、実に不衛生そうな肌の色をしている。

ほぼ山賊で間違いないだろ？

俺は馬車からそいつらの中に田舎ての奴がいるかどうか探した。

すると、大変うれしいことにいた。

一番大きな馬に乗つて、棍棒を肩に担いだ三十過ぎの大男が。

俺はそいつを見つけて、笑い出しそうになりながら、服についているフードを被つて馬車の外に出た。

馬車の後部から外に出ると、馬車の周りを囲んでいる数十人の男達が一斉に俺を見た。

そして、

「ああ！？ なんだコイツは！？」「商人の仲間か？」「つーか、他に入いねえの？ 特に女あ」「馬鹿お前、いてもこんなときに外出されるわけないだろ」「ええー、なんだよー、それが楽しみでコレやってんのに、いねえのかよー」「いやいや、まだそうだと決

まつてないだろ？ もしかしたら馬車の中で震えるかもよ？ 可憐なオトメが肩を震わせて、こう、プルプルと「うおつー！」マジか！？ 俄然やる気が出てきた！「

馬鹿みたいな口調でしゃべりだす馬鹿共。

俺はそれを聞き流しながら、商人のほうに歩き始めた。

馬車の前部では緊張した面持ちの商人が、馬の手綱をきつく握り締めていた。

俺はその商人の肩を軽く叩いて、馬車の中に入っているように言った。

「ここは俺がなんとかするから、あんたは無理せずに馬車の中に入つてな」

「あ、ああ、わ、わかった」

ひどく鈍い足取りで馬車の中に入していく商人。

俺は商人が馬車の中に入るのを確認した後、改めて山賊連中を見回した。

剣や斧、弓や槍。中には魔術師が使う杖を持っている奴もいた。

よく考えると、山賊にしては武装が良過ぎる気もするが、バッカスは昔は傭兵をやっていたから、おそらくそのつてをつかって仲間を

集めたのだろう。

まあ、そんな事はどうだっていい。

俺は口に手を当てて大声で叫んだ。

でかい馬の乗つて、棍棒を担いだ馬鹿を。

「おーいバッカス！ お前まだその棍棒使つてんのかーっ！ あんだけ汚ねえから持つの止めろっていだらー！」

俺の声はあたりに響いて、山賊連中にはもちろん。棟梁であるバッカスにももちろん届いたはずだ。

その証拠に、名前を呼ばれたバッカスの奴は露骨に動搖した。

あー、もしかしたらもう気が付いたかも。

ちよつと、つまんねえ。

俺の声を聞いたバッカスは声を震わせて、フードを被つた俺を指差してきた。

そして、

「……ち、その声。ま、まさか…」

「あつ！ その様子だと、もつ気がついたのか。脳みそ少ないのに
よく思い出せたなあ」

俺はその様子を見て、大きめの声でバッカスの奴を褒めてやった。

「げえっ…… マジかよー?」

完全に俺の正体が分かつたようすで、思いつきり動搖していた。

「おじおじ、懐かしの知り合いで、その態度はなんだよ

「え、あ、いや、これは、その~」

「…………。」

俺とバッカスが「な」「や」に話していると、その様子を見ていた山賊の手下連中は動搖を隠せないでいた。

いきなり俺が棟梁に話しかけて、しかも顔見知りのようだったのでどうしていいのかわからないのだるつ。

そんな中で、バッカスの奴が俺にこう切り出してきた。

「と、とにかくでなんで田那が「よな」と「よな」へ、例の団せんじつたんで？」

「あー、アレはちよつと都合があつて辞めてきた。今はギルドで働いてる」

「ぐ、ぐえ。そ、それはそれは」

「まあ、やつこいつわけだ。… もう、なんとなく分かってると想ひが

「… やつ」

「じつある？ 抵抗するか？」

「…………止めておきます。まだ、死にたくないですか？」

「アリか、じゃあ手ト連中はどうあるべ？」

「……ここからは多分抵抗あるでしょ。… でも、殺すのだけは勘弁してくませんか？」

「まあ、いいぞ」

「… ゆりこへお願こしあす」

俺とバッカスの交渉が終わった後、バッカスが俺に投降することを手下達に言つと、手下達は激怒した。

内容の殆どが俺を罵る言葉で、だが中には戦いもせずに投降する自分達の棟梁をも罵る言葉が聞こえた。

「……」

バッカスはその声をじっと耐えるようにして動かない。

「くそつ！ 頭アンタには失望したよつ！ もういい！ アンタが戦わないなら俺が戦う！」

その様子を見て、血の気の多い手下連中が怒りに任せて俺に襲い掛かってきた。

まず、魔術師が氷の槍の魔術で俺の体を貫こうとする。

だが、

パリン！！

「ハゼヌヨ」

俺はそれを足で蹴り飛ばして破壊する。

それに驚愕する魔術師

だがそれに怯むことなく、次々とやつてくる剣や槍を持った手下達。完全に頭に血が上っているようだ。

俺はつい見で一気にみんなぐれくなつた

久々「ちゅう」と「アレ」と使いはじめた。

「 吸ひ

俺は肺に空気を大量に送り込み、次に口に両手で作つた筒を当てた。俺の様子を見ていたバッカスが慌てて馬から下りるのが見えた。それは実に懸命な判断だつた。

これは高い場所にいる人間がくらうと、とても危険だ。

もちろん、俺につかこんでくる山賊の手下はもうと危険だ。

俺は肺に十分な空気が溜まつたのを確認すると、一直線に俺に向かってくる馬鹿どもに向かつて「それ」を発射した。

「風か雨か雪か霜か雲か霞か霧か」

瞬間

山賊たちは空を舞つた。

結麗に、木の葉のように、空を舞つた。

木の葉の音が止む。

たが木の葉のように絶麗に落ちる事はなく、ぐは、「ハリハリ」とあまり綺麗じやない着地音で持つて落ちてきた。

中には馬にしがみついて何とか空を舞うことがなかつた奴らもいたが、さすがに武器はどこかに吹き飛んだようだつた。

もちろん、吹き飛んだ奴は武器じゃなく、自分がなぜ空を舞つたのか訳がわからないようだった。

俺はその様子を見ながら、言った。

「今の結構加減が難しいからこれ以上連発すると、死人がでるぞ。

それでも、まだやるか?」

俺がそう言つと、山賊連中は顔を見合わせて叫んだ。

『勘弁してください！』

こうして、俺は山賊の棟梁であるバッカスと、その手下を捕まえて懸賞金をたんまりといただいた。

山賊（後書き）

ガルーの技の元ネタは三匹の子豚で狼がやるアレです。
威力も多分同じくらい？

レンガで造った家は壊せないと 思います。

マジな戦闘はもう少しあつてからです。
ガチでキレたガルーに期待してください。

辻斬り（前書き）

ひよつとシコアルな話になつてこゝと思こます。

辻斬り

山賊の棟梁を捕まえ、懸賞金をたんまりとギルドからいただいた後、俺はテレサの働く警備隊の屯所に袋一杯の金を持って向かった。

しかし、

「は？ テレサの奴いねえの？」

運悪く、テレサの奴は仕事で屯所にはいなかつた。

なんていののか、屯所にいるほかの警備隊の人間に理由を聞くと、あつさり教えてくれた。

「急な仕事で同僚と一緒に現場に向かつたよ」

「急な仕事？」

「ああ、例の『辻斬り』が出たんだよ」

「…なんだそれ？」

俺は詳しく話を聞いてみると、俺が山賊狩りをしている間に王都で『辻斬り』が出たらしい。

しかも、ただの辻斬りではないようだ。

とんでもなく、強く、また残虐な奴が現れたらしい。

その辻斬りには、もう何人の一般市民が被害に遭い、被害者の中には女子供も含まれているそうだ。

そして、テレサが今この場にいないのは、その辻斬りの新たな被害者が先ほど発見されたので、その確認と捜査のためらしい。

俺はその話を聞いて納得した。

「なるほどな、だからテレサの奴はいないのか」

「やうこひことだよ。」

「それにしても、随分と物騒な話だな」

「ここは王都なんだから、これだけ人がいれば悪事や人殺しは珍しくないよ」

「…やうこひもんか」

「やうこひもんだよ。…とひひひひひあね。まだ彼女はしづまらくここには帰つてこなこと思つよ。」

「あー、やうか。じゃあ、また別の田でくるわ

「やうか。一応、あなたが来たことは話してくよ」

「頼んだ。ああ、ついでに、その辻斬りには気をつけろって言つておいてくれ」

「わかったよ。あなたも気をつけてな。」

「まあ、考えておくわ」

俺は屯所にいた若い隊員に向かって軽口を呂きながら、屯所を後にした。

…後になつて、思えば。

この時、

その辺斬りとテレサが遭遇する可能性について、もつと頭を働かせるべきだった。

警備隊の任務には夜間の見守りなんでものがあって、テレサがその任務に就く可能性だとか。

女子供を斬る非道な辺斬りの行いを、氣の強いテレサがどう思つたのかとか。

他にも、色々と考えるべきだった。

特にあの「笛」についても、あの壁もつと詳しへ話しておるべきだつたんだ。

…だけど、もう遅い。

：俺がテレサに会つのは、この次の日だ。

：それまで俺とテレサは街で会つことも、道ですれ違つ事もない。

：だから、この次の日の朝。

俺は、病院の病室で体中包帯でぐるぐる巻きにされた、まるでミニマムのよつたテレサと会つこととなつてしまつたらんだ。

運悪く、夜間の見回りで例の「辻斬り」に会つてしまつたらしい。警備隊の同僚も一人いたらしが、全く太刀打ちできず、体中をボロボロにされた拳句に逃げられてしまつたらしい。

片足にギブスを嵌めて松葉杖を突いた、テレサの同僚がそう教えてくれた。

そして、教えてくれた。

テレサが何故こんなミイラのような状態になってしまったのかを。

理由は単純だった。

テレサが諦めなかつたからだ。

あいつは最後の最後まで、戦つてしまつた。

腕や足を折られ、体中を切り刻まれても、剣を手放さなかつた。

だから、だ。

だから、辻斬りを楽しませてしまつたんだと、テレサの同僚達は教えてくれた。

「あの辻斬りは、腕を折られても向かつてくるテレサを見て楽しそうに笑つてやがつた……！」

「……あいつは遊んでたんだよ。何度も立ち上がりては向かつてくるテレサを見ておもちゃだと思つてたんだ……。」

悔しそうにうろたえてるテレサの同僚達だつて、軽症とはいえない怪我を負つてゐる。

ここからだつて必死に戦つたのだらう。

だが、実力の差がありすぎて辻斬りは楽しむことはできなかつた。

だから、ここにテレサに比べると比較的軽症ですんだのだろう。

……そして、逆に辻斬りを楽しませてしまつたテレサは……。

「…………。」

利き腕は折られ、足も左足は折られ、右足はひびが数箇所入つている。

そして、顔や頭には地面に打ちつけた痣やこぶが多数あり、切り傷はもう数え切れないほどある。

幸い、今後の生活に支障をきたすような致命的な傷はなかつたものの、重傷には違いない。

「…………スウスウ」

今は鎮静剤と睡眠薬のおかげでやすらかに眠つてゐるが、逆にその対応はどれだけその傷が酷いのかがはつきりわかつてしまつ。

俺はその姿を網膜に焼き付けながら、テレサの同僚達に聞いた。

「 どんな奴だった？」

「 「 」 」

俺の言葉を聞いた瞬間、テレサの同僚達が怯えるのがわかった。

だが、そんなことはどうだつていい。

俺は怯える彼らから情報を出来る限り聞きだした。

そして俺はテレサの同僚達に頭を下げて礼を言った後、病院の医者に袋一杯の金を渡して、病院から出た。

そして、病院の外で待っていたルースと合流した。

「 ……どうでしたガルー。テレサさんの容態は…」

「 重傷

ルースの質問に、俺は単語で答える。

「 ……まさか命の危険があるとかは…！」

「 大丈夫だ、それはない」

「それは、よかつた…！ ホツとしましたよ…」

「……」

「…」れからどうするつもりですか？」

「……」

「…例の辻斬りは『生死問わず』の賞金首になりましたよ」

「……」

「…突然話は変わりますが、今夜は『満月』ですね」

「……」

「私の力を使って、ある程度の範囲を人払いしましょう」

「……」

「…ガルー。」

ピタツ

俺は一度立ち止まり、ルースの奴に礼を言った。

「……悪い

「……いいえ、どうか気にしないでください」

俺の礼を受け取り、ルースは頷いた。

「…………。」

俺はそれを見た後、再び歩き出した。

グツグツと、腹の中で何かが煮える音が聞こえる。

もう、一つのことだけしか考えられない。

殺したい。

ぐちゅぐちゅになるまで殺して、殺して、殺してやりたい。

体がなくなるまで、殺し尽くしたい。

殺したくて、殺したくて。

もう、堪らない。

一秒でも早く、俺は。

「殺したい……！」

頭の中で何度もテレサをあんな目に遭わせた辻斬りを殺し続けながら、俺は街を歩いた。

辻斬り（後書き）

ぶちキレ中のガルーです。
問題なれば次で戦闘。

戦闘開始（前書き）

自分、酷い話書いてるほうが書くスピード早いです。
復讐とか絶望とか挫折とか、書いてるとすこしく楽しい。
……もしかして自分で、かなりやばい？

王都の夜。

とある人気のなくなつた酒場で、俺は酒場のカウンターに座る「そいつ」に声をかけた。

いや、声をかけたところよりも、宣告したと言つたほうがよかつたかもしけない。

俺はそいつに向かつて宣誓した。

「死ね」

ボツ！

宣言とほぼ同時に蹴りを「そいつ」の背中に掛けて放つた。

「ツー！」

だが、「そいつ」は俺の蹴りを椅子から転がり落ちるようにして避けた。

そして、

「…一体、なんのつもりだ？」

そう言つて、俺の攻撃を避けた「そいつ」はゆっくりと身を起して

た。

「…………。」

俺は「そいつ」の格好を改めて確認した。

背丈は170ほどで比較的細身の男。

服装は大陸の人間の服ではなく、東国風の丈の長いヒラヒラしたものの。

男のくせに髪が長く、頭の後ろで馬の尻尾のように紐で縛つてある。

そして、男が腰に持っているかすかに湾曲した細長い物体。

すべて、テレサの同僚から聞いた話と一致する。

そしてなにより、男が腰の持っている物体からは「匂い」がする。

動物やモンスターの血とは違う、人間の血の「匂い」が。

俺はそれを確認した後、「そいつ」に向かつて言った。

「てめえを殺す」

「…ほう、拙者の正体がわかるか。ふむ…。これはちと、斬りすぎてしまつたか」

「状況がわかつてゐなら話が早えな。なりさつせと、…死ねつ！」

言葉と一緒に同時に距離を詰め、右足で「そいつ」の首を狙つた。

「ふつーーー！」

だが、「そいつ」は俺の蹴りを身を反らすことで避け、今度は腰に持った獲物で俺を攻撃してきた。

一閃

まるで、閃光のような一撃が俺の蹴り足に向けて放たれた。

閃光と俺の蹴り足がまるで交差するように交わる！とするが、俺は蹴りの軌道を無理矢理変える。

「つらあーーー！」

俺は足の踵を曲げ、閃光に向かって踏む漬すように足を振り下ろした。

ガキンッ！！

俺の足と閃光が交わり、金属音が酒場に響いた。

「…それが、てめえの獲物か」

俺は自分の鉄靴の先にある、「そいつ」の獲物を見た。

変わった刃物だった。

細長いくせに、妙に身が厚い。

おそらく、東国の戦士が使う「刀」というものだらう。

「…驚いた。拙者の初撃をこのようにして防ぐとは…」

「……つるせえぞ、辻斬り」

「…ふむ。もしかして、お主は拙者が斬った奴らに縁のある者か？」

「…だつたら、じつしたよ」

「ふふつ。「試し切り」のつこでこそお主のような手練が現れるとは嬉しい限りだ」

「…今、なんつった？」

「試し切りと言つたのだ。」この名刀の

そう言つて、顎で俺の足と鎧迫り合いをしている指す辻斬り。

そして、そのまま話し続ける。

「この刀は、大陸に渡つた拙者の国の鍛冶師が大陸の鉱石を使って作つた刀でな。實に不思議な「力」を持つてゐるのだ。

だが、その「力」を使うには少し「慣れ」が必要でな。少し、この街の人間に協力して貰つた

「…………」

「おかげで、隨分この刀に慣れることが出来た。これで拙者は…」

「黙れ…」

「ん?」

俺はべらべらと喋るクソ野郎に向かつて、黙るよつて命令する。

そして、

ガツー！

足で弾くやつにして辻斬りの獲物を蹴り、辻斬りから距離をとった。

辻斬りも鶴迫り合いから開放されることを望んでいたのか、再び距離を詰める事はしなかった。

そして俺は辻斬りと距離をとり、辻斬りに殺氣を込めてこう言つた。

「本気で殺す」

「…………。」

俺の台詞を聞いた辻斬りは、黙つて俺の事を見た。

その日からは先ほどまで喋り続けていた時の余裕はなかった。

おそらく、俺の本気の殺氣を感じ取つたのだろう。もう無駄口を叩く余裕はなくなつたようだ。

スウツ

「…………」

俺はその様子を見ながら、ゆっくりと右腕を前に突き出した。

そして、その状態で「ある言葉」を呟いた。

『右腕獣化』

その瞬間、俺の右腕は怪物の腕へと変わった。

右腕は肩口から手の指先にいたるまで、黒い毛皮が生え、その腕は膨張した筋肉で服を突き破った。

「！？」

その様子を見ていた辻斬りは驚きの表情を見せるが、俺はさうこ、今度は左腕を前に突き出した。

スウッ

そして、右腕と同じように、また言葉を呟いた。

『左腕獣化』

すると、左腕も右腕と同じように怪物の腕へと変わった。

「…………。」

グツ！グツ！グツ！グツ！

何度もその怪物の手で拳を握り感触を確かめる。

そして、

「ブチ殺す」

俺は怪物の両腕で拳を構え、改めて辻斬りと対峙した。

人狼族と呼ばれる獣人族がいる。

彼らは総じて身体能力、もつと言えば戦闘力が高い。

だが、彼らが本当の力を發揮するのは「人狼化」した時だ。

彼らは「人狼化」と言う、半狼半人の狼の顔を持った怪物のような姿に変わることが出来る。

この姿の状態の彼らは極めて強力で、まず歯が立たない。

そして、満月の夜。

この日、もし人狼族に戦いを挑む人間がいるならば、そいつはよほどの馬鹿者か自殺志願者のどちらかだろ？。

彼らは満月の夜、無敵になる。

おそれりく、単体で下級の竜すら圧倒する事が出来るだろ？。

その理由は、おそらく対峙すれば嫌という程に理解できる。

今までに、王都に現れた殺人者がそつだといつよ？。

閃光の様な斬撃が走る。

何度も何度も、ガルーの体を辻斬りは刀で斬るが、それは全く効果がなかつた。

すべて、ガルーの怪物の様な両腕に阻まれる。

見た目はただ毛皮の生えた腕だが、それはとんでもない勘違いだ。

まるで、鋼鉄の毛皮。

腕を斬るどころか、毛の一筋すら斬る事ができない。

むしろ、斬っているこちらの刀が駄目になってしまひのではないかと思つほどに、強固な腕だつた。

それを感じた辻斬りは一度距離をとつた。

「…これが、大陸の魔術といつものか。…なんと強力で面妖な」

そう言つた辻斬りの表情は苦虫を噛み潰したようだつた。

それに対し、ガルーは表情もなく口ひつをついた。

「そんなんちんけなもんと一緒にするな。これは『自前』だ」

その言葉に辻斬りは不思議そうに聞き返す。

「自前だと？ まさか、お主人間ではないのか？」

「あいにくと、俺は人狼だ」

「なんと、畜生の類か」

「…なんだと？」

自分の種族を畜生呼ばわりされたことに怒りが増すガルー。

そして、瞬間。

ガルーの攻撃が始まつた。

「殺す……！」

ガルーの怪物のような手にはするどい鉤爪が生えており、その爪が辻斬りを襲う。

辻斬りはそれを持っている刀で防ごうとするが、斬撃は毛皮に阻まれ効かず、徐々に距離を詰められていく。

そして、ついに壁際まで距離を詰められた。

「くたばッれ……！」

それを見たガルーは拳を辻斬りの顔面にかけて放った。

ガンッ！！

「ぐッ……！」

拳は辻斬りの顔面に入り、辻斬りは壁に激突した。

だが、辻斬りは殴られた瞬間に顔を思いつきり捻り拳の威力を逃が

していた。

そのせいで首が吹き飛ぶ事はなく衝撃で吹き飛ぶだけで終わつた。

「…なんて奴だ。その腕の防御力にこの膂力だと？…怪物め

「うるせえ。黙つて殺されろ」

「…それは、御免こうむる」

そう言って、壁に激突した辻斬りは壁に背を預けながら立ち上がつた。

だが、足にキているのか、ガクガクと足が揺れている。

「…………」

それを見てガルーは足を振り上げた。

ガツ！-

「ぐはッ！-」

ガルーは辻斬りの鳩尾に蹴りを入れた。

そして、蹴り足を腹から引くことはせずそのまま足で壁に押し付けて辻斬りの体を壁に縫いとめる。

まるで、標本の昆虫のような状態の辻斬り。

手にはまだ刀を持っているが、それはガルーの両腕には効かない。また、腕以外の場所を斬ろうとしても、壁に縫いとめられた状態では斬撃を放つたとしても防がれてしまう事だろう。

それが分かっているガルーはただゆづくりと足に力を込めていった。

「……。」

「ぐつ……！ があつ……！」

グツ！ ググツ！

まるで、虫を足で潰すように足で腹を踏みにじるガルー。

このまま続けていけば、内臓がつぶれるか碎けた骨が内臓に突き刺さる事だろう。

いや、もしかしたら足が腹を突き破るかもしれない。

それほどに執拗な行動だった。

「……。」

それをガルーは、無表情にただ淡々と続けていた。

人の腹を突き破らんばかりに腹を踏み続ける怪物の腕を持つ男。

彼がしている事は辻斬りという殺人者に相応の報いを受けさせてい
るだけなのだが、

その姿はまるで悪魔のようだった。

足りない（前書き）

短いです。

足りない

「ぐああ……！、があつ……！」

「…………。」

グリイツ！！

辻斬りは、自分の腹を圧迫し続けるガルーの足から身をよじって逃げようとするが、ガルーは足に力を込める事でそれを阻止する。

これにより、辻斬りはさらに苦しむ事になった。

「ツ~~~~~！~！」

辻斬りは言葉を発する事が出来ないほどに苦しみ、悶絶する。

「……ちつ」

スウッ

その様子をガルーは無表情に見ていたが、何を思ったのか突然、辻斬りを押さえつけっていた足を退けた。

「ガハツ……！　ハウツハウツハウツ」

壁に足で押さえつけられていた辻斬りは突然の解放に驚きながら、痛む腹を押さえながら深く呼吸を繰り返した。

そして、辻斬りは呼吸が落ち着くと顔をあげた。

すると、

「ツ……」

「…………。」

そこにはまるで自分が落ち着くのを待っていたかのように、じつとこちらを見ているガルーの姿があった。

「……」
「……」
「……」

そう言つて腹を押さえながら立ち上がった辻斬りの目には怒りが宿つていた。

辻斬りはガルーの行動にプライドを傷つけられ、今にも飛び掛かりそうだった。

だが、その姿を見たガルーはただ淡々と言葉を返した。

「 足りない」

「 … それはどうこいつ意味だ？」

ガルーの言った言葉の意味が分からず聞き返す辻斬り。

だが、それにガルーは答えない。

それどころか、逆にガルーは辻斬りに質問をした。

「 苦しみが足りない」

「 … なに？」

突然のガルーの言葉に少し面食らう辻斬り。

だが、そんな辻斬りの様子などお構いなしにガルーは話し続けた。

「 あいつが苦しんでるのに、何でお前が苦しんでないんだ？ なんでお前の腕も足も折れてない？ 体に傷がついていない？」

「 ……。」

「 なんでお前はそうして平氣で立てるんだ？ … あいつは傷だらけなのに、何でだ？」

「 ……。」

「 お前は、もつとボロボロになるべきだら？ もつと惨めに地面に

這い蹲るべきだろ?」

「…………。」

「ひどな事ぐらこでくたばるなよ。もひと、もひと、苦しめよ。」

「お主、まわか…」

そこで、辻斬りはガルーが自分を解放した理由を理解した。

辻斬りはガルーのことを怖れるよつとして見た。

「… なあ」

ガルーはさりに喋り続ける。

言葉に抑えきれない怒りを、田に殺意を込めて、辻斬りに向かって喋り続ける。

「何で、お前生きてるんだよ」

辻斬りはこの時確信した。

ガルーが手を抜いたわけでも、遊びで自分を解放したわけではない
ということを。

「イラつぐ。テメエが生きてる」とも。息吸つて、そりやつて立つ
てこることも… 全部が全部

田の前の男は、おやじ。いや、間違いない。

「我慢、できない」

自分を鬻り殺しにするつもりなのだと、ついと。

牢獄（前書き）

ちょっと、ガルーの強さを第三者に話してもらいたくて書きました。

牢獄

場所はパンゲア王国にある、とある牢獄。

そこには、つい先日ガルーが捕らえた山賊の棟梁であるバッカスとその手下達が捕らえられていた。

そして、そこで彼らは何かを話していた。

「棟梁）、あのガラの悪い男はなにもんだつたんですか）。棟梁、知り合いみたいでしたけど」「あー、それは俺も気になつてた」「俺も俺も」「つーか、あいつ強すぎでしょ」「もしかして、棟梁が傭兵だつた頃の仲間？」

どうやら、彼らは自分達を捕らえたガルーの素性について自分達の頭に話を聞こうとしているらしい。

「…ああ？」

だが、話を催促されたバッカスはまるで苦虫を噛み潰したような顔で話している。

だが獄中は余程暇なのか、頭をボリボリと搔いた後にすぐ嫌そうな顔で話した。

「あの人は人狼だよ」

「「いッ！？」」「

その言葉を聞いた手下達は自分達を捕らえた男が正体を知つて驚いた。

そして、口々に手下同士で話を始めた。

「人狼って、狼の獣人でしょー!?」「獣人って、闇で変態貴族の奴隸とかになつてるから弱いんじゃないんですか!?」「いや、猫や兔の獣人はそうかも知れないが、狼は違うんじゃないのか?」「たかが獣人のくせになんてあんなに強いんだよ!」

牢の中で騒がしくし始めた手下達を見て、このままでは看守がやつてしまつとバッカスは自分の手下達に冷水を浴びせることにした。

「…お前ら、ウルフヘジンつて知つてるか?」

「「へつ? ウルフヘジン?」」

「人狼族の戦士団。半端なく強い化物集団なんだが…、知らないのか?」

「「…はい」」

「…俺たちを捕まえたガルーつて人がその一員なんだが…。こいつらはマジで『ヤバイ』ぞ」

「ど、どりやばいんですか?」

「まず、敵としてあつたら間違いなく死ぬ」

「「えつ……？」

「一人ひとりが下級のドラゴンを殺せるぐらい強い。もう少し、仲間意識も強くてモラルも高い」

「「……へ、へえ」」

「「こいつらは、主にモンスター殺しの戦闘集団なんだが。他にも他国に売られた獣人を助けたりもする」

「「へ、へえ……」」

「あと、キレさせると本気でヤバイ。特に、今のお前達の話を聞かれてたらマジでヤバイ」

「「へつ……？」」

「こが遠い目をして話す自分達の頭を見て、困惑する手下達。

だが、そんな手下達の様子など気にせずにバッカスは話し続けた。

「奴らはプライドが高い奴が多いからなあ。自分達の一族を馬鹿にする言葉を聞いたら、言った奴らはまず半殺しにされるなあ」

「「……」」

「……仮の話だが、闇競売であいつらの仲間を一人でも競売にかけてみろ。……参加した奴ら全員死ぬぞ」

「「いつ……！」」

「人狼は仲間意識も強いからな。人身売買や奴隸市に仲間が売られたと話を聞いた瞬間に、一族総出で殺しにくるぞ。」

「「…………うわあ！」」

バッカスの言葉を聞いた手下達は顔を青ざめさせた。

まさか、人狼族がそんな危険な奴らだとは知らなかつたからだ。

そして、そんな顔を青くする手下達を見てバッカスは最後の忠告をした。

「だから、あいつらを馬鹿にしたり害を『』えるような事はするなよ
？」

「…もし、やつたらどうなります？」

「楽に死ねるよう祈祷つけ」

「「…………。」「

「言つておぐが、俺たちが捕まつた時は特別だ。普通だつたら俺らはここで息してない。お前ら、俺があの人と知り合いでホントよかつたな」

「あの人、そんなにヤバイ人だつたんですか！？」

「…まあ、ヤバイな。怒らせたら、同じ人狼族でも手が負えないみたいだ」

「どんだけ強いんですか！？」

「同じ年の人狼三人を、フルボッコにするぐらいだな。もちろん一人で」

「さつきの棟梁と今の話をくつづけると、下級のドロゴンを一人でフルボッコに出来るってことになるんですけど！？」

「あの人ならそれぐらい出来るな」

どこのか納得するよつに首を縦に振るバッカス。

それを見た手下達は顔を見合わせ、さらに顔を青ざめさせた。

だが、そんな中。

「あのー、棟梁」

「ん？ どうした？」

手下の一人がバッカスに恐る恐る質問した。

「…もしそのガルーツて人怒らせたらどうなります？」

「ん？ そりやお前、簡単だよ」

「…とこど？」

手下の質問にバッカスは答えた。

「お前ら、ドラゴンがキレたら周囲の物はどうなる？ 特に、ドラゴンを怒らせた奴の末路なんて子どもだってわかるだろ？ つまり、そういうことだ」

「…………。」

その言葉に手下達は顔を引き攣らせ、自分達の心に絶対にしてはいけない事を刻み込んだ。

そんな自分の手下を見ながら、バッカスはポツリと呟いた。

「……まあ、余程の馬鹿じやなれば、あの人を怒らせないだろ。普段は、めんどくさがりのチンドラみたいな人だしな」

だが、そんな事をつぶやくバッカスは知らない。

話の当人であるガルーは今、完全に「ブチ」キレており、怒りの対象である異国の剣士と死闘を繰り広げている事を彼は知らない。

もし、知つていればバッカスはどんな手を使ってでも脱獄を試みただろう。

牢獄（後書き）

亞人（ドワーフ、エルフ、マーメイド、獣人、竜人、など色々な種族）

獣人（人狼、ワーキャット、その他色々な動物の獣人。獣と人の中間みたいな奴らは全部ここに分類します）

適当な分類で申し訳ないです。

意味がない

「魔剣」と呼ばれる武器がこの世にあり、辻斬りが持っている刀も「それ」に属する。

遠距離にいる相手だろうが致命傷を与える事が可能な、かまいたちを起こす風の「魔剣」だった。

辻斬りはその力を試すために何度も人間で試し切りをしてきた。

何度も人を斬る事で魔剣は手になじみ、そして、その力を完全に扱えるようになったと辻斬りは確信していた。

だが、

それはガルーの前では意味がなかつた。

風の刃が男の体に直撃する。

だが、男はそんな攻撃を意にも介さずに自分に向かつて歩いてくる。

ゆっくりと、ゆっくりと。

まるで、自分の攻撃などなかつたかのように平然と歩いてくる。

風の刃は確かに男に当たった。

傷もつき、血も流れている。

だが、意味がない。

風の刃でつけた傷など、この男には意味がない。

なぜなら

自分がつけた傷は、次の瞬間にはもう塞がってしまうのだから。

ありえない早さで完全に傷はなくなる。

その光景は不気味としかいいがない。

そして、その光景を見てやつと自分は気がついた。

「化物」に、こんなものが効くはずがないことに。

そこから、地獄が始まつた。

「死ねッ！！ 死ねッ！！ 死ねえッ————！」

「…………。」

辻斬りの剣は魔剣の類だったらしく、何度も見えない刃が俺の肌を斬つた。

さすがの俺も魔力を帯びた「力」には傷を負う。

初めはそのことに薄ら笑いを浮かべていた辻斬りだったが、しばらく攻撃を続けていると顔を驚愕で歪めた。

「どうこう」とだッ！？

「…………。」

辻斬りは気がついたようだつた。

血が流れたのは傷を受けられた一瞬だけで、それ以後は全く血が流れていなることに。

これは人狼の力の一つだ。

あり得ない早さでの「回復力」

どんな深手を負おうとも、人狼の体は次の瞬間から回復が始まる。

そして、辻斬りが見えない刃でいくら斬りつけられようが、臓器までは届かない。

ならば、辻斬りは俺の体に致命傷を負わせることが出来ない。

俺はそのことを辻斬りに確認させると、辻斬りが放つ「見えない刃」を受けつつ、辻斬りの皿の前に立った。

そして、

「くたばれ」

「ぐえッ！？」

「…………。」

その言葉とともに、右拳を辻斬りの鳩尾に深く入れた。

辻斬りのぐぐもつた悲鳴を聞きながら、俺は辻斬りを殴り続けた。

まず腹を殴り、骨を碎き、内臓を潰した。

そして、それに悶絶して床に転がる辻斬りを、俺は蹴りつけた。

腹や背中はもちろんのこと、顔や股間も何かがつぶれるまで蹴り続けた。

その間、辻斬りはあまりの痛みに悲鳴も上げられず、ただ呻き声をあげるだけだった。

そして、辻斬りが呻き声をあげることも出来なくなると、俺は辻斬りの手を踏み碎いた。

爪を碎き、骨も甲の部分から指の先端まで碎いた。

手が砕けたことを確認すると、俺は足をじりて、今度はもう片方の手を同じように踏み碎いた。

気がつけば、いつのまに辻斬りは虫の息だった。

だが、俺はそれが気に食わなかつた。

顔を掴み、少しだけ足をばたつかせる辻斬りを壁に押し付ける。

「まだ死ぬな。本番はこれからだ」

そして、俺は辻斬りの鼻が潰れた顔を手で齧づかみにしながら、酒場から外に出た。

意味がない（後書き）

別の作品が書けなくて、リハビリ目的で書き始めた作品ですが、何か感想をもらえると嬉しいです。

特に、読みにくかったり意味がよくわからないところがあつたら教えてください。

改善できるように努力します。

変貌

俺と俺に顔を掴まれた辻斬りが酒場の外に出ると、外にはルースがいた。

「…………。」

そして、俺はルースに向かって一言。

「…やつてくれ」

「わかりました」

俺の言葉と同時に、ルースが俺に手のひらを突き出すように向けた。ルースの手のひらからは魔術師が使う魔術陣が展開され、俺に向かつて放たれようとしている。

だが、それは俺を攻撃するものではない。

「場所はここから大分離れた森の中です。…そこならば存分に暴かれます」

「…わるいな」

「いいえ、気にしないでください。…気持ち、わかりますから」

「…そつか」

「はい……」

「……そろそろ、『運んで』くれ」

「はい、わかりました……」

ルースはさう言つて、手のひらにあつた魔術陣を俺に向かつて放つた。

ボウツー！！

放された魔術陣は俺の周りを囲み、俺は魔術陣で四方を囲まれた。

ルースはそれを確認すると、何か集中するように目を閉じる。

そして、

『転移せよ

そう俺に向かつて弦き、俺のある場所に『運んだ』

王都から離れた森の中

「…さすがルース。こんな森の中に一発で転移させるか…」

『転移魔術』と呼ばれる、ある一定の場所から場所に特定の物や生物を転移させる事ができる上級魔術がある。

これには術者の能力によって、距離や転移させる物の重量などが制限されるのだが、ルースはその魔獣で男一人を王都から

離れた森の中にやすやすと運んだ。

それはルースが一流の魔術師である証明なのだが…、

しかし、そんな事は今のガルーにはもつどうだつて良かつた。

今は、ただ…

「やつと暴れられるな。街は人も物も多すぎて駄目だ。『本気』が出せない」

「…あ、…ああ」

「俺は言つたよな？　『本気で殺す』つて」

「うあ……！ うああ……」

ガルーが手で顔を掴んでいる辻斬りから何か怯えた声が聞こえ始めた。

辻斬りが怯えているのは、一瞬で知らない場所に飛ばされた事への恐怖でも、自分の体に走る激痛からでもなかつた。

ガルーはそんな怯える辻斬りに顔を近づけながら、せわやくよくな声で訊ねた。

「……なあ、人狼の本当の姿を見たことがあるか？」

「あ……ああ……？ いあ……！」

だが、辻斬りは言葉を返すことが出来ない。

鼻だけではなく、歯も砕かれいるので口の中がぼろぼろで喋る事ができないのだ。

しかし、喋れない理由はそれだけではない。

「うああ……、うあつ……」

「……聞いても意味がなかつたか。……まあいいか

そう言って、辻斬りを冷たく見下ろすガルー。

「ひい……ひい……ひい……」

そしてガルーは、怯える辻斬りを見ながら最後の会話を交わした。

「ただ、よく『見て』おけ」

そう言つて、ガルーは「人狼」へと変わった。

ザワリツ！！

まず、顔が人のそれから獣それに変わった。

黒い体毛が全身から生え、鋭い犬歯と鉤爪が伸びた。

全身が強靭な筋肉に覆われ、一回り以上も大きくなつた。

そして、今までガルーが立っていた場所に黒い狼の怪物が現れた。

「ツー————！」

それを見て、辻斬りは堪えらず悲鳴を上げた。

辻斬りは、目の前で変貌していつた怪物に恐怖した。

「ああ……！ ああ……！ ああ……！」

そして、さうに何か声を上げようとしたが、…それよりも早く。

「…………」

「ひつ……」

人から獣へと変わった怪物が……、

まるで、憂也會晴らすよつて。

何度も何度も。

無言でその鋭い牙と爪で、辻斬りの体を引き裂いた。

牙で噛み砕き。

爪で引き裂き。

体の「形」がなくなつてしまつまで、ただひたすらに。

『ぶち殺した』

変貌（後書き）

感想お待ちしています。

次回からは、今回の出来事でテレサに執着度が増したガルーが暴走する話を書いていくつもりです。（あくまで予定ですが）でも、その前にお見舞いの話とか書きます。

今回短いです。

私が病院のベッドで目が覚めたとき、一番に目に入ったのはガルーの姿だった。

ガルーは私のベッドのすぐ傍で面会者用の椅子に座り、腕を胸の前で組み顔を下に向けて寝ていた。

起きているときも不機嫌そうな顔をしていたが、寝ているときも不機嫌そうに眉をしかめて寝ていた。

だが何故彼が目の前にいて、何故私がこんな場所にいるのかと不思議に思った。

しかし、自分の体に巻かれた包帯を見た時、例の辻斬りと戦った事を思い出した。

：今の自分の状況から考え、私は辻斬りに病院送りにされた事がわかつた。

そして、そのことからまだあの辻斬りは捕まつていないので考え、思わず体を起こさうとしてしまった。

すると、

ズキンッ！！

「痛つ……」

体を起しあつとするその動作の途中、激痛で体が動かなくなつた。おそらく、これ以上体を動かせば全身に激痛が走り、悶絶することだろう。

だが、あの辻斬りのことを考えると、このままベッドで寝てこることは出来ない。

私は体中を走る痛みを歯を食いしばり、ベッドから起き上がるつとした。

だが、それは止められた。

止めたのは医師でも看護師でもなく、先ほどまで不機嫌そうに寝ていたガルーだった。

「……。」

彼は無言で私のベッドに近づき、私の頭に手を置いた。

そして、

スツ

「…寝てろよ

「え…」

私の頭に手を置いた彼は、普段の彼からは想像できないほど優しい声でそう言つた。

彼の口から聞こえたのは、まるで病氣の子どもを心配する親のようない信じられないほど優しい声だった。

私がそのことに驚いていると、彼は私の頭に手を置いたまま続けた。

「…お前、頑張ったよ。こんなにボロボロになるまでよく頑張った
よ

そう言いながら、小さな子供にするように私の頭に置いた手で私の髪を撫でる。

「…でも、疲れただろ？ だけど、もう大丈夫だから。お前が心配するところは何もないから…、大丈夫だから

そう言って、私の頭を優しく撫でるガルー。

そのままゆっくりと私の体をベッドに戻す。

そして、彼は私をベッドに横たわせながら優しく囁く。

「…だから、安心して寝てる」

私は驚きで固まつたまま病院のベッドの上で彼を見た。

黒ずくめの服に黒い髪を白い紐で無造作に縛った青年。

紛れも無くガルーだ。

間違いない。

だが、普段の彼と決定的に違う。

普段の彼は、ぶつきらぼつでいつも不機嫌そうだ。

なのに、今はものすごく優しい。

まるで別人のようだ。

「ガ、ガルー？」

「ん？」

「…あの、どうして」

私はそのことが不思議で仕方なく、その理由を聞こうとした。

「…あれ？」

だが、その前に急激な睡魔に襲われた。

まるで、体が無理矢理休ませようとするかのように強制的に意識が閉じられていく。

だが、閉じられていく意識の中で彼の顔を見ようと、目を何とかして開けた。

（あつ…）

彼の顔を見た時、私は実に恥ずかしいことを考えてしまった。

彼がこんなに優しくしてくれるのは、私が心配だったのではないかと。

ガルーの顔を見て、そんな少し自意識過剰なことを考えてしまった。

だつて、そんな事を考えてしまつほどに。

ガルーの顔が優しかったのだ。

退院後の職場で

私が辻斬りに襲われてから、一ヶ月半後。

私は退院した。

襲われたときに出来た傷は、今はもうほぼ完治した。

入院した当初はかなりひどい状態だったのだが、医師や治癒魔術師の人達のおかげで今はとても元気だ。

傷跡が残つたりするかなど心配もしていたが、医者と治癒魔術の人
がかなり腕が良かつたのか、入院する前と殆ど変わらない肌となつ
た。

おかげで襲われてから一ヶ月半後の今日。

私は退院することが出来た。

…だがしかし、私には問題があつた。

…実は私は今ガルーに借金をしているのだ。

今回の怪我の治療費だが、ガルーが勝手に医者にお金を渡したらしく、私はそのお金で最高の治療を受けていた。

初め、そのことを聞いたときは驚いて、私は彼にお礼を言おうと思つていたのだが、ガルーは『あの日』以来全く見舞いに来ることはないかった。

立て替えてくれたお金を返さなきゃいけないのに、本当に『あの日』以来全く顔を見せなくなつた。

代わりに、ルースさんはよくお見舞いに来てくれた。

彼は本当によく気がつく人で、入院中の暇つぶしに面白い本を何冊も持つてきてくれた。

私はルースさんにガルーの居場所を聞いてみたりもしたのだが、ルースさんは「退院すればすぐにわかりますよ」とにこやかに笑つて答えてくれない。

そして今日、私はガルーに治療費を立て替えてくれたお礼を言えず、に退院した。

「…とりあえず、職場に明日から書類整理でもやらせてもうれるように頼もう

どこにいるかわからない男を捜すよりも、まずは自分の生活をなんとかするために私は自分の職場に歩き始めた。

そして、ありえない場所でガルーを見つけた。

「よひ、久しぶり」

「…………。」

私は目に前にいるガラの悪い男を見て、驚きで声がでなくなつた。

場所は私の職場である、警備隊の屯所だ。

そこは数人の警備隊の人間がいつもいて、書類整理や事件の報告書などをまとめている。

机が四つほどあって、その中の一つに見慣れた男が座つている。

そこにいたのは、私が入院中ずっと会おうと思っていた、目つきの悪い、黒ずくめ男だつた。

といつが、ガルーだつた。

私がその姿に声も出せないほど驚いていると、ガルーがとんでもないことを言った。

「言つてなかつたけど、俺にこじで働くから」

「はあつー?」

私はその言葉にやつと声が出せるよつになつた。

しかし、病み上がりか混乱しているからか、言葉がまとまらない。

「な、なんで! だ、だつてあなた! ギルドで、し、仕事」

「あー、ギルド? 別にあれば兼業でも構わないみたいだから、大丈夫だ」

「え、いや、だつて、ええー?」

私は驚きで頭がぐちゃぐちゃしてきた。

私がそんな風に混乱していると、

「だつて、いつでもしなきやお前が今度無茶するとか止められないだろ？」

ガルーが頭をかきながら少し困った顔でそう言つた。

「…？」

私はその言葉を聞いて、「まさか…！」と黙つた。

もしかして、この馬鹿は…！

私が頭の中で一つの仮説が浮かび上がつた。

(私が怪我したから、警備隊に入つた…！?)

あまりにも馬鹿げた考えだと思ったが、このガルーといつ男の過去を考えるとあながち間違いでもなさそうだった。

といつが、多分そうだ。

私はそう考えて、再び驚愕で固まつた。

一ヶ月後。そして、なぞの人影（前書き）

お久しぶりです。

これから展開に悩んで更新が遅れました。

詳しくは後で活動報告で書きます。

一ヶ月後。そして、なぞの人影

ガルーがテレサに屯所で働くと言い出してから早一ヶ月。

本当にガルーはテレサと一緒に警備隊で働き始めた。

初めはそのことに難色を示していたテレサだったが、ガルーの仕事をぶりを見ているうちに徐々に何も言えなくなった。

驚くべきことにガルーは警備隊の隊員として優秀だったのだ。

どんな落し物でも数日中に見つけだし、揉め事が起きれば来ただけで騒ぎを止める。

喧嘩中の頭に血がのぼった奴らだろうが、舌打ちをして「ああ？」と睨んだだけで喧嘩を止める。

見た目はチンピラだが、外見に反して意外と優しいところがあり、街で迷子などを見つけると仕事をほっぽってめんどくさそうにだが助けに向かう。

こんな隊員がいると近隣の住民が知れば、人気者になるのだろうが、ガルーは少し違った。

その理由は…テレサとの関係が原因だった。

ガルーは仕事中ずっとテレサのそばから離れない。

見回りだろうが、書類仕事だろうが、四六時中そばにいる。

まるで従者のようにテレサの後ろを歩き、テレサが仕事で何かを頼むと猛ダッシュでその仕事を片付けて戻ってくる。

その姿は傍目には情けなく見えてしまい、近隣の住民達はガルーのことを優秀な隊員とは思えず、住民の中には「テレサの腰巾着」「金魚のふん」などと呼ぶ輩もいる。

そのせいで、ガルーはあまり住民にすこいと思われることはないかった。

彼らがもしもガルーの本当の強さを目にすれば、そのような考えなど一度と思はずはないのだが…あいにくガルーが例の辻斬りを倒したこともわけあってあまり人に知られていないので、ガルーの凄さを知っている人間は王都には数えるほどしかいなかつた。

「あー、くそ。あの猫、ちゃんと暴れやがって」

「それはあなたが鬼のよつたな形相で追いかけたからでしょ？ きっと皮でも剥がされると思つたのよ」

「んな」としねえよ

「じゃ食べられるとでも思つたのよ」

「…お前は俺をどうこう見てるんだ？ あ？」

ガルーとテレサは街の巡回の帰り道、話をしながら歩いていた。

話の内容は、先ほど捕まえた猫の話だ。

猫は住民の飼っていた仔猫で、屋根に登つて降りられなくなつたのをガルーが屋根に登つて助けたのだ。

しかし助けたはいいが、猫はガルーに怯えたのかどうしたのか物凄く暴れて、ガルーの手や腕にひつかき傷をつけた。

そのことでガルーは愚痴をこぼし、「猫につけられた傷」ときでぐだぐだ言うガルーに向かってテレサがここぞとばかりにからかっているのだ。

「あー、くそ！ お前も一度は猫に引っ搔かれてみろ！ そうすれば俺の気持ちが分かるから！」

「残念、私は猫と相性がいいから引っ搔かれるなんて」とはあります
せん」

「は？ 相性？ そんなもの関係あるのかよ？」

「あるわよ」

「は？ やんものあるわ……けが…………あるなあ。…………」

「？ どうしたの？」

「……いや、お前の言うとおりだ。猫には相性がある。そして俺は相性が悪い。間違いない」

「どうやら、何か心当たりがあるようだ。」

「？」

ガルーの考え方変わりよつてテレサは不思議がつたが、そろそろ屯所の近くまできていたので、深く追求せずにそのまま一人で歩き続けた。

無言で歩き続ける一人。

その二人の様子を、実は遠くから見ていた人影がいた。

「…………。」

……だが、その人影は何故か

「……ううつ。ホントにこんな所にいたあ。しかも、知らない女の人といふやう」

二人が一緒に歩いている姿を見て、肩を落としていた。

影から聞こえるのは高い少女の声。

声からは隠しようのない悲しみが溢れ、ときおり鼻をする音も聞こえる。……どうやら泣いているようだ。

……暗殺者の類ではないようだが、何故か一人のことを恨みがましい目で見ている。

何故少女が泣いているかはわからないが、どうやら一人の内の片方は知り合いらしい。

その証拠に時折、「ガルーさんの馬鹿あ……」とか「女たらしの不良狼」などと、ある人物のことを恨みがましくつぶやいている。

……少女が何者なのかはまだ分からぬが、とりあえず敵ではなさそうだった。

一ヶ月後。そして、なぞの人影（後書き）

誤字と脱字の報告と感想をお待ちしています。

獣人の少女1（前書き）

短いです。

獣人の少女1

故郷で「ウルフヘジン」と呼ばれる戦士団に所属していた頃の話だ。

「ウルフヘジン」は他族から獣人を守るために出来た人狼族の戦士団で、その主な活動は他国にさらわれた獣人族の救出と村や集落をあらすモンスターの討伐だ。

当時の俺は戦士として、いくつもの密売組織を壊して同胞達を助けていた。

そして、その助けた同胞たちの中に妙につきまとうてくれる奴がいた。

獣人族の中でも敏捷性に長けた「ケットシー」と呼ばれる一族で、檻の中で競売にかけられそうになっていたところを俺が助けた。

しかし、そのせいでの妙になつかれた。

正直、子供の面倒など見たことがなくてどうしていいのか分からなかつたが、そいつを里まで帰すまでは仕方なく俺が世話をしていた。

おかげで戦団の仲間達からはいよいよにかわれた。

「足が痛い」と騒ぐのでおぶつてやつたり、「寒い」といつてぶるぶる震えているので「獣化」して湯たんぽの代わりになつてやつたり、色々と世話を焼いてやつた。

今思えば、よくあれだけ我慢して世話をしていたもんだと自分でも

感心する。

やで、問題はここからだ。

俺は断言する。

このことに関して俺は感謝される覚えはあつても娘まれる覚えは全くない。

ましてや、どじがのアホースのようにて女で修羅場になるようなことは絶対になーい。

それなのこびりじてだ？

「ガルーさんが嘘吐いたあ！ 私に嘘吐いたあ！」

「……ガルー？ この子あなたの知り合いで？」

「……。」

「私のことお嫁さんにしてくれたのに、嘘吐いたあ！」

「お、お嫁さん？」

「……いや、言つてねえし」

「うわーーーん！昔の出来事なかつたこと元よりうつしてゐるわー！」

「ガルー、あなた…」

「……勘弁してくれ」

朝、警備隊の屯所で、久しぶりにあつたそいつと見事に修羅場をつくっているのは……本当に何故だ？

獣人の少女1（後書き）

次はテレサ視点の話です。

獣人の少女2

「…相席していい？」

「え？ ああ、はい、どうぞ」

場所は早朝の大衆食堂。

私がそこで朝食の卵サンドを食べていると、小さな少女が相席を求めてきた。

私は断る理由もなかつたので相席を許すと、少女は突然こういってきた。

「…ねえ」

「ん？」

「あなたガルーさんの恋人？」

「ぶつ……」

突然現れた少女の言葉に思わずむせた。

「な、なに言つてるのあなたは！？」

「別に……ただ確認したかつただけ」

田の前の少女はそう言って、私からそっぽを向いた。

「え、えーと、とりあえずあなたは一体誰？ それに確認つて何？」

「私は」

先ほどのとんでも発言のせいで少し頭が混乱しているが、なんとか状況を整理しようと私は頑張った。

その努力が実ったのか、状況は少しづつ良くなつていった。

「何年かぶりにガルーさんに会いに行つたけど……ガルーさんいなくて、かすかな情報を手がかりにここまで来たの……」

「うん」

「でも、せつかく会えたと思ったのに、ガルーさんの隣に見たことのない人がいて……」

「…………うん」

話を聞いていいるうちにすでにじづつ分かったことがある。

少女はガルーの知り合いであり、名前はミーシャといつらじい。

そして、IJのミーシャと名乗った少女はガルーに会つために王都にやつてきたと話だ。

……どこかで聞いたような話だったが、とりあえずなんとかなく話の展開が読めてきた。

このミーシャという少女はガルーの恋人か何かなのだろう。

確か、ガルーは故郷を夜逃げしてきたはず。

それを追いかけてやつてきたのだらう。

泣かせる話だ。

だが、私はそこでふと思つた。

(というか、あいつに恋人とかいたんだ……)

考えてみれば、ガルーは20ちょっととの若い男で、恋人がいたって不思議ではないのだが……

「…………。」

見た目がガラの悪いチンピラ風の男の姿を改めて思い出す。

そして、次にその男が恋人に甘い言葉をやさやいている姿を思い浮かべる。

（……駄目。少女をかどわかしているチンピラのイメージしか浮かばない……）

そんな失礼なことを考えていると、ミーシャが私に語りかけてきた。

私は気持ちを切り替えて、ミーシャの言葉を真剣に聞いた。

「テレサさん……だけ？　名前」

「え、ええ、そうよ」

「……あなたガルーさんの何？」

「え？」

「……ここ数日、あなたとガルーさんの様子を遠くから見てたけど……、やつぱり恋人にはみえなかつた。……でも他人にも見えなかつた」

「……えっと、それは」

「……。」

「それは……」

私はミーシャの言葉に詰まつた。

ただの命の恩人だと説明しようとしたが、何故か言葉が喉から外に出なかつた。

「えつと……、私は……」

「つ…………！」

そんな私を見て、ミーシャは痺れを切らしたのか座つていていた椅子から立ち上がつた。

詰め寄りついたのが、それとも私にはもう用なしだとばかりに店を出ようとしたのかわからないが、席を立つとした。

だが、しかし

「まあまあ、そんな怒らないで少し冷静になりましょっ」

「……？」

「あつ……」

席を立つとするミーシャを背後から肩を押えるよつて伸びらせた男が現れた。

獣人の少女2（後書き）

次はルースの視点。

獣人の少女③

けだるい朝が一気に陽気な朝へと変わってしまった。

適当な店で朝食をとつていたら同居人の恩人があにやら修羅場を作つている姿を目撃。

しかも、原因はどうやら自分の友人であるガルーその人。

(これは気配を完全に断つて様子を探らなければならない)

そう思った私は、失礼だと思ったが、女性一人が座る席から少し離れた場所で彼女たちの話を盗み聞きすることを決めた。

だが話が山場を迎えた時、突然ミーシャという娘が椅子から立ち上がりうとしたので慌てて止めに入つた。

折角見つけたガルーに関する揉め事。決して逃してはいけない。

何故ならこんな面白そなことはめつたにないからだ。

「まあまあ、そんな怒らないで少し冷静になりましょ」

私は一旦ミーシャをもう一度椅子に座らせた後、三人で話合いを始めた。

テレサさんは知り合いだつたが、ミーシャとは初対面だつたので軽く自己紹介は済ませた。一応、ガルーとテレサさんの友人と説明した。

そして、

「ミーシャさんでしたか？ 何故あなたはガルーとこちらにいらっしゃるテレサさんの関係にそんなご執心なのですか？」

「…昔、悪い奴らに売られそうになつていつところをガルーさんに助けられて…」

「…つまり、ガルーは恩人というわけですか？」

「…はい」

「ああ、それでガルーと仲がいいテレサさんにこうして話をしているわけですか？ 彼女が自分の恩人とどんな関係なのか気になつて？」

「……はい」

「なるほどなるほど？」

思わず、テレサさんの方を見ながらにやけてしまった。

そして私はこの瞬間、面白すぎる人間関係が形成されていることがわかった。

ミーシャさんはガルーのことを恩人だと思っている。

またガルーはテレサさんの恩人だと思っている。

だが、ガルーの性格や、テレサさんの今までの様子を考えると、絶対「恩人」の方は助けたと思つていらない。

いやなんとも面白い人間関係が築かれている。

しかも、その内一人は昔からの友人だ。

「……」

私はこんな愉快な出来事はもつと盛り上げなければならぬと思って、ガルーが最も嫌がりそうなることにした。

私は、ミーシャさんのほうに顔を向けて話しかけた。この時わざとテレサさんのことは無視するように視界から外した。

「それで？ 結論は出ましたか？」

「まだ、です」

「それはなぜですか?」

「「Jの人が、はつきりしなくて…」

「まあ、本人からは少し言いにくいかもしれませんね」

「……うつ。」

「なんなら、もう一人の当事者から聞いてみてはどうですか? あ
つちなはつきりと言つと思ひますよ」

私がそう言つと、それまで会話に参加していなかつたテレサさんが
「ピクッ」と肩を揺らして反応した。彼女も気になつてゐるらしい。

自分がガルーからどう思われているのかが、

そこから先は簡単だつた。

元々、二人の関係が気になつていたミーシャさんと、自分がガルー
にどう思われているのか気になるテレサさん。

後は簡単だつた。

二人の女性の様子を見ながら、適当に一人を刺激するような言葉を
選んで言つてしまえば、後は一人が自分で行動を起こした。

しばらくすると、一人は覚悟を決めて椅子から立ち上がり、店から出ていった。

向かう先はもちろん警備隊の屯所だ。

私はその様子を椅子に座つたままのんびりと眺めた。

獣人の少女4

朝、警備隊の屯所に到着すると、何故かいきなり一人の女に詰め寄られた。

朝っぱらから女一人に詰め寄られている俺は、屯所にいる同僚達からの視線を全身に浴びてかなり居心地が悪い。

出来ることならば今すぐこの場から逃げたいが、テレサが俺をひどく冷めた目で見始めてるのでそれは出来ない。

この修羅場を潜り抜けなければ俺は恩人に軽蔑される。

「と、とりあえず、一度詳しく話し合おう。なつ？」

「…………。」

仕方がないので、俺がガラにもなくそつ提案すると、二人は一度お互い見つめあった後、『コクン』と俺のほうを向いて頷いた。

「じゃ、宿直室でちょっと話合つか

俺はその様子に少し安心し、屯所の奥にある宿直室で話合つようと提案した。

「…………。」

「…………。」

すると一人は、何も言わずにさっさと屯所の奥に向かった。

俺は一人が目の前を通り過ぎるのを少し青ざめながら見ていると、他の同僚たちから「早くいってこい！」と口パクとジェスチャーで急かされた。彼らもどうやら危険を感じているらしい。

「つたぐ、めんどくせえ」

何がどうなつているのかわからなかつたが、とりあえず大人しく同僚たちの指示に従つて一人の後を追つた。

宿直室には仮眠用の簡易ベッドと作業用の小さな机と椅子が置いてある。

だが、俺たち三人は椅子にもベッドにも腰掛けず、立つたままで会話を始めた。

「あー、色々と聞きたい事があるけど……、まず第一にお前誰だ？」

俺は部屋のいる小柄な少女にそう聞いた。実は屯所に来たときか

ら氣になっていたのだ。

「え？ オ、覚えてないの？ 私だよ？ ミーシャだよ？」

すると、ミーシャと名乗った少女が泣き出しそうな顔で俺を見つめ始めた。

「うう……」

その視線の居心地の悪いことに悪いこと。

まるで自分が悪いことをしているよつて酷く居たたまれない。どうやけり俺とコイツは過去に面識があるよつだ。俺は急いで記憶のそこからコイツとの関係を思い出す。

考えてみれば俺と女との関係性なんていいくらもあつたものではない。おそらく、昔俺が戦団にいたころ助けたか何かした奴だろう。

そうじゃなかつたら、俺とこんなガキが知り合はずがない。

「…………えーっと

改めて目の前の少女の姿を見てみた。

年は十代の後半で背丈は普通よりやや小柄。髪は白で瞳は少し赤みが入つた茶色。後ろ髪を三つ編みにして髪の色と一緒に白い髪紐で一本に縛つている。

昔助けた奴らの中からコイツと該当する記憶を急いで探した。すると、該当する奴が一人見つかった。

あの時は瘦せつぽのガキだったが、よく見れば面影がないわけではない。

思い出すと、一気に緊張感が抜けた。

「なんだ、お前ミィカ

「覚えててくれたんだ！？」

俺がこのガキの昔の愛称を呼ぶとガキが騒ぎ出した。正直かなり煩かったが、泣かれるよりはマシだったので適当に流す。

「あんだけ手がかかるガキはなかなか忘れねえよ

「嬉しい！ じゃ、あの約束も覚えてるよねー」

「は？ なんだそれ？」

俺はガキの言葉に違和感を持った。なんのことか全く分からない。

「俺、お前に何か約束したか？」

「したつー！ したよー！ お別れするとセー！」

「んー？」

「めかみに指を当てる間に思い出さうとするが、全く思い出せない。

寝小便の後始末をした記憶なりあるが

「お別れするとき』『今度会つ時はもつと一緒にしてやるよ」と
言つてくれたでしょ！」

「あー、言われてみればそんなこと言つたか

服にしがみついてグズるから仕方なくまた会つ約束をしたんだ
た。まあ、今の今まで忘れてたけど。

俺が少し昔を懐かしんで感傷に浸つてると、ミヤの奴が俺の田
の前に近づいてきた。

そして、いきなり俺の手を握り、首をくってつと傾げて『『言つて
きた。

「じゃ、約束守つて私と結婚して

突然の求婚に俺は

「ざわんな

普通にキレた。

獣人の少女4（後書き）

別に恋愛系を書いているつもりはないのに、この小説のページ下の小説紹介で恋愛系が増えていて最近驚いています。

獣人の少女5

「アホかお前は。俺なんかと結婚してどうすんだよ」

ガルーは突然のミーシャの告白を聞いて呆れたようにそう言った。
はつきり言って、ガルーはこの少女とどうじつなる気はなかつた。

元々、ガルーは色恋に対する興味が常人よりもかなり薄い。

なので、突然求婚の告白されてもあまり嬉しくない。といふが、
本当に興味がない。

「俺なんかじゃなくて故郷でもっと良い奴を探せ」

なので当然、ガルーはミーシャの告白を断る。

だが

「……やだ。ガルーさんじやなきや……やだ」

断られたミーシャは拗ねた子供のように顔を下に向けてガルーの
言葉を拒否した。

そして、泣き出しそうな声でガルーに自分の気持ちをぶつけた。

「だつて……私が好きなのはガルーさんだもん……他の人じやない
もん」

他の誰でもない。自分がことが好きなんだと声を震わせて言

つた少女。

「……あー」

これにはさすがのガルーは困り果てた。先ほども言つたとおり、ガルーはこうすることにはとことん疎い。だから、こんな時はどうすればいいのかわからないのだ。

そして、ガルーは徐々にミーシャの言葉に押され始める。

「……なんで私と結婚してくれないの？ 私のこと嫌い？」

「いや……あんな」

「私のどじが嫌い？ 言つてくれたら頑張つて直すよ？ だから……」

「いや、だから……」

ガルーはいつもの強気はビリくやう、ミーシャの対応に少し弱氣だ。

だが。

「……もしかして、『その人』のことが好きだから？」

突然ミーシャが言つたその言葉で状況が少し変わった。

「は？」

ガルーの口から間の抜けた声が出て呆然とした顔でミーシャを見る。その顔は何を言われたのかわからないという感じだ。

そして、そんなガルーの様子などお構いなしにミーシャは言葉を続ける。

「その人のことが好きだから、……私とは結婚してくれないの？」

そう言つて、ミーシャは震える指先でテレサを差した。

「つ……！」

指差されたテレサは顔を真つ赤にして、それを隠すよつと慌てて顔を下に向けた。

しかし、やはりガルーがどんな反応をするのが気になり、下を向いたままちらちらとガルーの様子を伺つ。

震えた手で指をさすミーシャと、顔を赤くするテレサ。

そんな一人を見ながら、ガルーは頬をポリポリと搔く。

先ほどまでの弱氣はどうへやら、今は普段どおりの悪人面に戻つている。

そして。

ミーシャの問いに、ガルーは当たり前の様にこいつ答えた。

「そうだよ」

『『！？』』

ガルーの姿に照れはない。ただ、当たり前のことを当たり前に言つてゐるだけだった。

さりに、ガルーは続けた。

「俺はコイツが好きだよ。だから、お前と結婚するのはもちろん、他の奴とどうこうなるつもりも全くない。……だから、悪いけど」

そう言つてガルーはミーシャの方を向き、頭一つ分背が低い彼女に手を合わせた。

そして。

「俺のこと諦める」

ガルーは再度求婚を断つた。

その後。

部屋の中にはじめからしゃべり上げる少女の声と、その少女の頭を優しく撫でる男。

そして、顔を真っ赤にさせながらも事の成り行きをすべて見守つ

ていた女がいた。

獣人の少女5（後書き）

最近調子が悪く、更新が遅れています。大変申し訳ないです。

獣人の少女 6

「そりいえばお前、どうして俺が王都にいるって知つてたんだ？」

「ガルーさんの里の人から聞いた」

「……マジか」

泣いていたミーシャが落ち着いたのを機に、ガルーは少し疑問に思つていたことを聞いてみた。

すると、ミーシャからガルーの里の人間から聞いたと言つ。

これにガルーは絶句する。里を出るときは何も言わずに出て行つたはずなのに、何故か居場所が知られていたからだ。

これはどういうことなのか？

ガルーは少しあせつたようにミーシャに事の詳細を聞いた。

すると。

「何で里の奴らが俺が王都にいるって知つてるんだ？」

「ガルーさんの里に、Rさんつて人から手紙が来ていて、そこに…」

「…」

「セー」「？」

「『ガルーは今、上都で女性のヒップを追いかけています』つていう内容の手紙があつて……」

「……あんの野郎」

ガルーは手紙の送り主に心当たりがあつた。ほほ間違いなく奴だ
らと確信する。

「最近おとなしいから何をしていいのかと思つたら、こんなぐだら
ねえ事してやがつたのか！」

「ガルーさん？」

「う…、ああ、悪い。このちの話だ。あーっと、それで里の奴らは
その手紙を見て何か言つてたか？」

「んーっと、『奴にもやつと春が』とか『あいつが惚れた女を見て
みたい』とか『どんな口説き文句をあの顔で言つのか考えるだけで
腹が据れる』とか、そんなこと言つてた」

「それ言つたの、兵团の奴らだったか？」

「うん」

「……つか」

忘れなこよひによく覚えておいつと、ガルーは心に刻んだ。

「そんで、お前もその手紙を読んで王都に来たわけか」

「……うん」

「それで、これからどうする？ 故郷に帰るのか？」

「わかんない。先のことあんまり考えずに来ちゃったから……」

「せうか……。金とかは大丈夫か？ あとどれだけある？」

「（ル）まで来るまでに大分使っちゃったから、……残り少ない」

ミーラはそう言つて、腰に下げたポーチから財布を取り出しがま口を広げた。

財布の中を見たガルーは少し苦い顔をした。

「……少しまずいな。王都は他の都市と違つて宿代が高い所が多いから、このままだと……」

「なにか仕事でも探さないとね。……私未成年で獣人だけど雇ってくれるかな？」

そう言つて少し不安な顔をするミーラ。誰も知り合いのいない場所でも仕事探しに恐怖を感じているのだらう。

そんな様子のミーラを見てガルーはある提案をした。

それは。

「だったら、俺の前の仕事やつてみるか?」

「え?」

「ギルドって言つんだが、色々な仕事もあつて人を差別しないから結構安心して仕事が出来るぞ。格安の寮もあるから宿代

も大分浮くぞ」

「ほ、本当に?」

「ああ、どうする紹介してやるつか?」

「ぜ、是非おねがいします」

「じゃ、これか行くか?」

「うん...」

「よしつー、じゃ、行くか! あつ、テレサ、お前はピーチか?..」

「え、私!」

突然話しかけられたテレサは夢から覚めたようにハツと顔を上げた。

今までガルーとミーシャがずっと話していたので、いきなり声を

かけられて驚いたようだ。

しかし、それにしても顔が少し赤いのは何故だろ？

「わ、私はいいよ。仕事もあるし、ふ、一人で行って来て」

「そうか。じゃ悪いけどよ、手続きで色々と時間潰れるから俺は今田休むつて言って置いてくれ」

「う、うん。わ、わかった」

「お前、なんか顔が赤いけど大丈夫か？」

「だ、大丈夫だから」

「それならいいけど。もし、なんかあつたら前にやつた笛吹けよ」

「う、うん」

「じゃ、悪いけどあとは頼んだ。行くぞ！！！」

「はい。ガルーさん」

二人は揃つて屯所を出て、ギルドに向かい、後に残されたテレサは顔を赤くしながらガルーが少し前に言った言葉のフレーズを脳内で繰り返し繰り返し聞いていた。

『俺はコイツが好きだよ。だから、お前と結婚するのはもちろん、他の奴とどうこうなるつもりも全くない』

「~~~~~！！」

テレサはガルーの台詞を思い出し、仮眠用のベッドに飛び込み手足をバタバタさせた。

「それにしてもガルーさん本当にこれでいいの？ 言われたとおり保護者欄にルースつて名前書いたけど」

「いいんだよ」

「でも、私この人のこと全然知らないよ？」

「ジゴロのろくでなし。これだけ覚えておけばいい。あと、何かそいつについて聞かれたら、『顔は知らないけど保護者です』って言つておけ」

「いいのかなあ？」

「いいんだよ」

「うーん」

「あいつは今回ろくな事してないからな。少し懲らしめてやつたほうがいい」

「でも、これだとルースさん誤解されない？子持ちだと思われるかも」

「それが狙いだ」

「うーん」

「あんま深く考えるな。それより、試しに何か仕事やつてみるか？討伐系はいいのがあるぞ」

「ガルーさんが一緒にどれでも一緒にから任せると」

「じゃ、これにするか。おーい受付。これ請けるから判子してくれ！」

そう言つて、ガルーはのん気に受付に向かつて二人分の仕事を請けにいった。

後日、警備隊の屯所にて。

「ガ、ガルー！この前言つてた私のことが好きって話だけど……！」

「ん？ああ、アレがどうした？」

「あ、あれはどういう意味で言ったのか詳しく述べてくれ……！」
「あ？ いや意味も何も『恩人』のことが好きじゃなきゃ『恩返し』
なんてするわけないだろ？」

「…………。」

「ん？ おい。どうした？ なんだか顔色が……」「

「なんでもないから」

「いや、なんでもないってこうシリフじや…………」

「ホント、なんでもないから」

「そ、そつか」

「それじゃ私仕事があるから、これで」

「あ、ああ」

何故かいきなり不機嫌になり田の前から去つていくテレサ。

そして、その姿に少し怯えるガルー。

そんな一人の様子に、聞き耳を立てる警備隊の隊員達。

色々と問題はあるが、とりえず今は平和だった。

獣人の少女6（後書き）

次から新しい話を書くつもりです。
えぐい話とかバトルとか書きたい気分です。

武闘大会1

「ガルー。あなたこれに出てみませんか？」

「あ？」

夜、同居人であるルースが何かの紙を渡してきた。紙は何かのチラシのようだ。

紙を渡されたガルーは怪訝な顔でそれを読んだ後、「なんだこれ？」と紙から顔を上げてルースに説明を求めた。

「何つて、今度王都で開かれる武闘大会のチラシですよ」

するとルースは恍けた口調で渡した紙に書かれていた内容を要約した。

「あー、つまり、アレか？ 僕にこれに出場しろってか？」

「そうです」

「……」

ルースの説明を聞いたガルーは嫌そうな顔で渡されたチラシをルースに返した。

「めんどい」

ガルーはそう言って、自分のベッド方に行き、そつそつと眠りうつをする。

「え？ ガルー、あなた興味がないんですか？」

「棒切れ振り回してやる気なくしたら負けとか、どうせそんなルールでやるんだろ？ 正直、そんなガキの遊びみたいなもんにはやる気がない」

欠伸交じりにガルーはそう言いながら、硬いベッドの上に横にならうとする。どうやら本当に武闘大会に興味はないようだ。

「そういうわけだから、その大会に興味があるんなら自分で……」「でも、大会の優勝者には結構な額の賞金がでるらしい……」

『ガバアツ！！』

今にも眠りにつこうとしていたガルーがベッドのシーツをふつ飛ばして、ルースの方にドスドスと足音をさせて向かっていった。

そして、ガルーはルースの胸倉を掴んで先ほどの台詞について聞いた。

「いくらだ！」

「はい？」

「賞金額はいくらだ！」

「ああ、優勝者には200万ほどのお金が渡されるとチラシには書いてあります」

「よし！」

「ガルー？」

ガルーは拳を握つてガツツポーズをした後、ルースに突つ返したチラシを再び奪うようにして手に戻した後、もう一度念入りにチラシの内容を読んだ。

『武闘大会』

「場所」

軍の大型鍛錬所。

「出場条件」

当田までに申し込み窓口で手続きをした15歳以上の成人。

「ルール」

魔術は使用禁止。武器は持ち込み可能。

相手に負けを認めさせるか、試合続行不可能なほどのダメージを負わせれば勝ちとする。

しかし、相手を殺害した場合はその場で即刻退場。

チラシには他に予選のルールやら本選の勝ち抜きがどうのこうの書いてあつたが、ガルーはめんどくさいので読み飛ばして大会の日時が書かれている場所を探した。すると、紙には大会の日時は今から一ヶ月後と書かれていた。

これなら事前に報告しておけばなんとか休みがとれるだろ？

そうすれば……。

「大会に出場してテレサさんの家の借金を返せますね」

「…っ…？」

チラシに夢中になつていたガルーのことをにんまりと笑顔で見ているルースの姿があつた。

「いやー、チラシを持つてきてよかつた。気に入つてもらえたよう
でなによりです」

「……お前、最初から」

「はい？」

「……あー、なんでもない。お前にはまだ返してもらつてない借り
もあつたの思い出した。それに、お前に礼とかすんの気持ち悪い」

何かを言おうとしたガルーだったが、寸でのところで思いとどま
り、憎まれ口を叩いてチラシを持つたまま再び自分のベッドの方に
向かつていった。

そんなガルーを見てルースは、先ほどまでの笑顔とは違つた、
また別の笑顔でもつて、

「ははっ！ そうです。それでこそガルーです！」

と、にこやかに笑うのであつた。

武闘大会2

獣人は高い体力や運動能力が優れるばかりか、『獣化』という能力を持つている。

この『獣化』という能力は、その種族の特性を活性化させる事や人間から獣の姿に変身することが出来る。

ガルーは人狼。つまり、狼の獣人であり、『獣化』すれば抜群の嗅覚と桁違いの運動能力を得る。また、この運動能力の

上昇に伴い筋力が増加し、ガルーの体は天然の鎧へと変わる。

素手の拳や蹴りでは痣一つできないし、木の棒で叩こうが、むしろ木の棒の方が先に壊れる。もちろんガルーは無傷だ。

だが、だからと言って剣で切られれば肌は切れるし、多少だが肉も裂けるだろう。

前の辻斬りのときにやつた『完全獣化』をすれば、それも防げるのだろうが、それは少しまずい。

何故なら、武闘大会で狼の怪物が出てきたら大騒ぎになってしまふからだ。

だが、防具もつけずに大会に出てしまつては大きな怪我をしてしまう可能性がある。

なので、ガルーは他の出場者が振り回す剣から身を防ぐ防具を探

す必要があった。

しかし、大会が開催されるまで後一週間をきつたても、ガルーは自分が気に入つた防具を見つけることはできなかつた。

元々、ガルーの戦い方は素手によるゴリ押し戦法が主であり、防御などは殆ど考えずに生きてきたのだ。

人狼の並外れた回復能力により傷がすぐに完治するせいだろう。

ガルーは身を守る防具についてかなり無頓着だつた。

しかし、今回は獸化することも出来ないし、高速で回復する姿も人目に晒したくは無い。

いくらこの国が亜人や獸人と仲が良いと言つても、そんな姿を見せればこの街に居づらくなる。

そうなつてしまつては恩人であるテレサに恩を返すことも出来なくなつてしまつ。

それは大変困るので、ガルーは早急に防具を探す必要があつた。

そして、何店かの防具店を見て周り、都合のよさそうな武具を購入した。

武具は「ナックルガード」と呼ばれる拳闘士が剣を持つ人間の斬撃から身を守るための防具で、手の甲から肘までをすっぽりと硬い金属で守り、また使用者の打撃を上げる、ガルーにはお似合いの武具だつた。

実際、ガルーはこの武具で、一度害獣駆除として街の外で何匹かモンスターを狩つてみて、中々の『威力』だったのでかなり気に入つた。

さらにガルーは警備隊の仕事でもそのナックルガードをつけたまま働き、体にナックルガードの重さを馴染ませて大会までの数週間を過ごした。

武闘大会2（後書き）

スランプ中。
しばらく、いつもハビリをしようかと思います。

武闘大会3 予選

武闘大会に出場するためには、「予選」と呼ばれる試験に通過しなければならない。

また、この「予選」に通らなければ武闘大会本選には出場することは出来ない。

多少面倒な事かと思うかも知れないが、年々増加傾向にある怪我や事故をなくす為には必要な措置であった。

そして、予選のルールは至って簡単。

この国で「騎士」と呼ばれる役職の人間達と模擬戦をし、そこで実力を認められれば、本選への出場資格を獲得できる。

特に勝つ必要は無く、大会に出場しても無事で終わられる程度の腕があると、騎士に認めさせれば良い。

騎士はこの国でも上位の戦士でなければ就くことが出来ない役職であり、その戦闘技術は当然高い。なので、「おのぼり」でやって来た田舎の若造や金田当てで実力不足の輩はここで落とされる。

だが、過去にたまたま調子が良くて騎士に痛撃な一撃を入れることが出来た年端もいかぬ少年いたり、見え麗しい貴族の令嬢が優勝候補にまで上り詰めたこともあった。

「よく稀にだが、こういった例外が現れることがある。大会主催者が予想しない、ダークホースが。

そして、今回の武闘大会の予選でもそのダークホースが現れた。しかも、とびっきりのダークホースが。

「そいつ」は、予選で担当の騎士を一撃でぶつ飛ばした。

文字通り、ぶつ飛ばしたのだ。

「そいつ」は試験開始と同時に走り、剣を構える騎士に構わず、全力で騎士をぶん殴った。

騎士はしつかりと拳を剣で受け止めいたし、全身に鎧も着込んでいた。

にも、かかわらず、騎士は殴られた衝撃に足を踏ん張ることが出来ず、勢いのまま宙を舞つた。

騎士がわかつたのは、自分が物凄い力で殴られたことだけだった。

騎士は地面に落ちた後、何とか立ち上がったが、騎士の剣は刃が潰れ使い物にならず、これ以上の模擬戦は不可能となつた。

そして、「そいつ」は周囲で見ていた他の騎士や他の予選参加者が唖然とする中、模擬戦をした騎士から本選資格をあっさりと獲得

した。

試験開始から一分も経たない時間での出来事だった。

そして、この話を聞いた大会関係者は内外を問わず「そいつ」の名前を調べ、そして覚えた。

「そいつ」の名は ガルー。

最近警備隊に所属し始めたばかりの、まるでチンピラのよつば田つきの悪い青年だった。

武闘大会4 貴族の娘

武闘大会の会場である大型鍛錬場は元々は何百年も前の王が造らせた闘技場だ。

大きさは高さ約50メートル。長径約200、短径150メートルの橢円型の建物。

天井は無く、建物の中は闘士達が闘うための広い細かい砂地の地面とそれを観戦するための観客席があり、昔はここで闘士達が命をかけた賭け試合をしていたのだが、今は軍の鍛錬場として使われているのみ。

「ごく稀にだが、今回のような武闘大会などのイベントがある時は一般の平民にも開放され、観客席に收まりきらない人がこの元闘技場に押し寄せる。観客は入場料として食費一回分ほどの金を払われるが、それ以外は金銭を払うことなく、

特に騒ぎを起さなければ大会を最後まで見ることが出来る。

このイベントは元々国王がちょっと金稼ぎと優秀な人材を確保しようと考えたものだ。

そのため、闘技場の外には食べ物関係の露店が並び、闘技場の中では貴族などがめぼしい人材はいないかと大会出場者の様子をじっくりと見定める。

だがそんな中、観客席の中でも特に上等な席に座るいかにも

貴族な姿の女性は、眉を顰めていた。

真っ白な生地に金色の刺繡を凝らしたドレス。身に着けた指輪やネックレスなどの貴金属の質。

そして、なにより平民ではありえない肌の白さとキメの細かさ。毎日櫛を入れなければ生まれない美しい金髪。

小ぶりの顔に対しても大きな瞳。それと、すっと通った鼻筋に綺麗なアゴのライン。

血筋と、その力を使つた口頃の手入れをして手に入れた美しさ。

その美しさを持った彼女は間違いなく貴族の、それも名家の令嬢だった。

だが、彼女は今はその美しい顔を顰めながら闘技場の様子を眺めていた。

すでに大会は開会の挨拶は終わり、これから大会出場者達の熱い戦いが始まるのだが、彼女は不機嫌そうだった。

それと云つのも、彼女が今この場にいるのは彼女の本意ではないからだ。

簡単に説明すれば、年頃になつた彼女に専用の護衛を雇おうとする父親と喧嘩をして、彼女は今この場にいるのだ。

父親が雇おうとするのは屈強な大男ばかりで、彼女は見るだけで怖かった。だが、恥ずかしさからその事を父親を前にして言うこ

とが出来ず、何かと文句をつけて断っていたのだ。

しかし、だからと言つて護衛を雇わないわけにはいかず彼女と彼女の父親は何度もその事で衝突した。

そして何度も喧嘩の時、つい彼女は「自分の護衛くらい自分で探せます！」と大口を叩いてしまったのだ。

その結果、こうして強者が集まる武闘大会で彼女は自分の護衛になってくれそうな、「見た目が怖くない、でも強そうな人」を探しているのだった。

だが、中々そんな人間を見つけることが出来ず、先ほどから闘技場に現れる出場者は恐ろしい見た目の者ばかりだった。

「はあ……」

その様子にため息をつく彼女。それを見て、後ろから侍女の姿をした女性が声をかけた。

「アマリーお嬢様。よき方を見つけられましたか？」

「全然よ、リース。全員見た目が怖くて、目の前に立たれただけで足が震えそうだわ」

「まだ大会は始まつたばかりです。お嬢様。きっとこれからお嬢さまのお目にかなう人物が現れるはずですよ」

「だと、いいのだけど……」

そう言って、アマリーと呼ばれた貴族の令嬢は慰めの言葉をかけてくれた友人兼世話係でもあるリースという名の侍女に返事をした。

リースの母はアマリーの乳母であり、その関係からはアマリーの専属の侍女として働くことになり、幼い頃から彼女たちは姉妹の様に育つた。

リースはアマリーよりも歳が三つほど上であり、常に冷静な判断をする彼女は、少し頑固で強情な所があるアマリーの良き「姉役」として、屋敷の人間たちからも高い信頼を得ていた。

もちろん、アマリーもリースのことを信頼しており、何か相談事があればリースに必ず相談していた。

それがいつものパターンであり、今回もそうであった。

今日、この場に彼女たちがいるのは、アマリーがリースに相談した結果であった。

貴族の娘が個人で長期的な護衛を雇うのは難しい。

探す場所がかなり限られる上に本人の実力を図ることが難しいからだ。

ギルドなどで護衛を雇うことも出来る。しかし、ギルドの人間は短期での護衛をするが、長期でどこかに使えるようなことはしない。それは、彼らは何かに仕えるような事をすることを嫌うからだ。

他には、騎士やその従者などをスカウトするなどの方法もあるが、何かコネがなければ彼らに会うことすら難しい上、話すら聞いては

もらえないだろ？

その為、彼女たち今回の武闘大会を見に来たのだった。

武闘大会には仕官口を探しているビリカの騎士やその従者など、実力のある人間が多く集まる。

そんな彼らと上手く交渉が出来れば、アマリーの今回の問題は解決する可能性がある。

なので、アマリーとリースの二人は貴族専用の闘技場のよく見渡せる観客席に座つて大会出場者の闘う姿を見ているわけなのだが……。

「実力が拮抗している所為かしら……？　どなたも同じように見えてしまつわ……」

試合が始まり、一人の出場者が剣や槍を持つて闘っているのだが、アマリーの目にどちらが強いのかはつきりとわからない。

勝負が終わってみても、どちらも強かつたとしか思えず、どちらかを護衛にしたいとは強く思えなかつた。それになにより、どちらの戦士も筋肉隆々でアマリーは怖かつた。

その後も何試合か試合が始まつたが、どの出場者もアマリーは護衛にしたいとは思えなかつた。

「どうしましょ？……リース。このまま誰も護衛にしたいと思える人が出てこなかつたら……私

「お嬢様、大丈夫です。まだ大会は始まつたばかりですから、……それにここで見つからなくても私がまた何か方法を探して参りますから」

「リース……、ありがとうございます。……あなたが侍女で本当によかつたわ」

「勿体無きお言葉ありがとうございます、お嬢様。さあ、では次の試合を見ましょう」

心底安心したように言つアマリーに腰を折り礼を述べるリース。

「ええ、そうね」

そのいつもやり取りにアマリーは平常心をとり戻り、試合を観戦するために闘技場に目を戻した。

「次はどうやら、今大会注目の強戦士同士の試合らしいですよ」

リースが大会開始前に大会係員からもらつた大会案内に書かれた出場者の紹介を読む。そこには大会ルールから出場者の人数と対戦表、簡単な紹介文が書かれている。それをリースは読んでアマリーに説明しているのだ。

「まあ、一体どんな方たちが闘つのかしら?」

「片方はもうすぐ小隊長に任命され事が決定されている騎士をますす。お嬢様」

「まあ、ではその方は護衛には誘えないわね。残念だわ」

「ええ。ですが、もう一人の方は警備隊に最近勤め始めたばかりの新人だそうです。上手く交渉できればスカウト出来ます」

「そうなの？ なら、どんな方なのかしっかりと見なきゃいけないわね」

「はい、お嬢様」

二人はそう言って闘技場にこれから現れる二人の戦士を待つた。

そして待つことしばらく、二人の戦士が闘技場に現れた。

一人はいかにも騎士らしい、銀色の鎧と大きな大剣を構えた金髪の二十代前後の若い青年。

青年は鎧の上からでも見てわかる屈強な体つきをしており、顔つきも歳のわりにずいぶんと引き締まっており、いかにも「やりそうな青年」だった。

それ対して、もう一人の戦士の姿は、……なんというかアレだった。

髪も服も黒くて印象が悪いことも原因だが、目つきが鋭く、籠手らしき物を嵌めた拳を「ガチン、ガチン」と鳴らす姿がいかにもアレっぽい。

……戦士といつよりも街の路地裏などにこなガウの悪いチンピラ。

それが、登場した黒い戦士の印象だった。

「な、なんだか、ずいぶんと変わった方のようね」

「変わった方、というよりもただチンピラだしちゃう。アレは

「で、でも、中身はもしかしたら違うかもしれないわよ?」

その時。

『なあ? まだ試合始まらねえの? 早く始めてくれよ』

アマリーとリースが登場した黒い方の戦士について話していると、
その黒い戦士が退屈したように大声で誰かに話しかけている。

『さつあと始めてくれねえ? 退屈で仕方がねえんだけど?』

どうやら試合を開始する審判にでも話しかけているらしい。それ
にしてもすいぶんと言葉が荒い。

「…………。」

それを見て、アマリーもリースも確信する。

「……チンピラです。お嬢様

「……そうね

これがガルーとアマリー達との出会いであり、ガルーにとっては面倒との始まりであった。

武闘大会4 貴族の娘（後書き）

情景などをもう少し書いたほうがわかりやすいと指摘され、今回少し頑張つてみました。

まだまだ未熟かもしませんが、これからも頑張つてわかりやすい文章を書いていきたいと思います。

何か感想や意見がありましたら、どうぞお気軽に感想に書き込んでください。

武闘大会5 騎士との戦い

「あなた、武器はどうしたんですか？」

「あ？」

ガルーが試合が開始されないことに焦れていぬと、対戦相手である騎士の青年から声をかけられた。

「見たところ、あなたは武器を構えるどころか持っていないようですが？」

騎士の青年はガルーが武器を持たずにしての場に立っていることに疑問を持っているようだった。

「いや、持っているわ」

「は？」

だが騎士の疑問に対してもガルーは、拳を構えることとした。

「凶悪なのを、二つ」

かかげた物は、二つの拳。

ガルーのこの行動こそが騎士に対する答えであり、己の武器の所在証明であった。

「なつ！ あなたはまさか……！」

その姿には騎士が畠然とし、観客にも動搖が走った。

武器の使用を認められたこの大会で、ガルーという男は素手で挑むと言つてゐるのだ。

一応、腕にはナックルグローブと呼ばれる武器を装備しているが、それが剣や槍と戦うのにどれほどの力を持つてゐるだらうか？

剣や槍などの鋭い剣先と長い間合いにかかるれば、素手など殆ど無力に近い。熟練した使い手が相手ならば、尚のこと分が悪い。

だが、拳を構えるガルーからはそんな不利な状況に対する怯えや恐れを感じない。いや、むしろ騎士や観客が驚いている姿を楽しんでいる様子すらある。

「どうした？俺は武器を抜いたぞ。アンタも、ソレを早く抜けよ」

騎士が背負つてゐる大剣の鞘を、構えたまま拳から一本指を出して指す。

「あ、あなたは本氣で素手で戦つ気なのですか！」

「おつ」

「つ……！ 刃物を振り回すチンピラや酔っ払いを相手取ることでは訳が違つのですよ！ もしかすれば命の危険が……！」

騎士は武器を持つ自分と戦つことに危険性について必死になつて

説明を始めた。その様子から相手になにか武器を持たせて対等の勝負をしたいという必死さが伝わってくる。騎士という仕事柄のせいか、それともこの騎士の性格なのか、ずいぶんと人がいい。

だが、そんな親切心を意にも介さない男がいた。

「つむつせえんだよー。『じちや』『じちや』言つてこいる暇があるならかかつて来いっ！」

もちろん、その男とはガルーのことだ。

ガルーは田の前で『じちや』と説明を始めた騎士にあつさりとキレた。

戦闘前の高いテンションも理由だろうが、なによりこいつた説教や説得などのやりとりがガルーは大嫌いだったのだ。

おそらく、昔さんざん故郷で聞かされたせいだらう。

「戦う相手に説教なんかしてんじゃねえよ。ぐだぐだ言つてねえでさつさとかかつて來い！ それとも、てめえの背中にあるそれはただの飾りか？！？ ああ！？」

そのせいが、いつもよりも若干口調が荒く、観客席にいた女性達から悲鳴が上がった。

しかし、なかなか始まらない試合に苛立ちを募らせていた男たちからは野太い声で同意の声が上がり、観客席からは試合が始まつていなにもかかわらず歓声が鳴り響く。

だが、その歓声の中にいる一人の戦士は睨み合つたまま動こうとしない。

「…………。」

ガルーは拳を構えたまま相手が剣を抜くのを待ち、騎士は先ほどガルーに言われた言葉に、『騎士』として対応するか『男』として応じるか迷つてゐるようだつた。

騎士はだいぶ迷つたが、ついには

「…………」までも言われては、剣を抜かない訳にはいきませんね

騎士は、剣を抜いた。

騎士は戦いを願つてゐる相手に対して自分の考えを押し付けているのは、愚かだと思つたからだ。

だがこの考えは、騎士として相手に戦士に敬意を払つた末の考え方のなか、それともガルーの台詞に怒りを感じた若い男の言い訳なんかは騎士は自分でもわからなかつた。

だが、今はそんなことよりも。

「全力で相手をさせていただきます」

騎士は相手の戦士と全力で戦い、勝利を勝ち取ることだけを考え

ていた。

そしてガルーも。

「いいぜ。来いよ」

ただ相手を叩きのめし、勝つことだけを考えていた。

「…………。」

銀色の輝く大剣を構える騎士と、鈍く光る拳を構えるガルー。

この大会では試合の開始には銅鑼が鳴らされるのだが、今の二人にはそんなものは必要なかつた。

相手の構えや足運び、そこから得た情報。

試合を始める前までは互いにはつきりとわからなかつた事だが、戦う気になり、間合いを詰めていくにつれて徐々に相手の力量がわかると、銅鑼など氣にしてはいられなくなつた。

ガルーと騎士は互いにそれほどの脅威を相手に感じていたのだ。

そしてその脅威を、恐怖と感じる前に一人は動き出した。

まず最初に動いたのは騎士。

「せいつ！」

一気に間合いを詰めながらの踏み込み斬り。

相手の右肩から左腰へかけて斬りかかるうとするが不発。ガルーはそれをやすやすとバックステップで避ける。

そして、そのまま今度はガルーがその強靭な足腰のバネを駆使し、バックステップから一歩足を踏み込み、後ろ回し蹴りを繰り出す。

「らあつ！」

ガルーの足が鎌のように騎士に襲い掛かるが、それを騎士は剣を地面に突き立て、盾のようにして構えること防ぐ。

「ぐうつ！」

だが、ガルーの桁外れの脚力から繰り出された蹴りは剣ごしに衝撃を与える、相手に隙を作る。

その隙を逃さず、ガルーは連激を繰り出す。

間合いを完全に詰めた後、掌底を相手の脇腹に一発入れ、その衝

撃で顎を下がらせ、下がった顎に右肘を力ちあげるように振り上げる。

「ぐはっ！」

技は決まり、騎士は仰け反り倒れそうになるが、なんとか足を踏ん張り踏みとどまる。

「はあ、はあ、はあ……！」

だが、顎を強打されたからか脳が揺れ、ふらつく騎士。

「おひあつー！」

それに止めをさそうとするガルーだが……。

「つ……！」

騎士の目に光が戻る。

「しつー！」

間合いを詰められ容易に剣を振れない状況だったが、しかし剣の柄でガルーの頭部を狙う。

「ちいっー！」

ふらつく相手からの反撃にガルーは意表をつかれ、それを掠らせてしまつ。

大したダメージではなかつたが、止めをさす手が止まり、その隙に騎士が距離をとつてしまつた。

間合いが開き、今度は騎士に有利になる。

「はあ、はあ、はあ」

騎士は間合いを保つたまま呼吸を整え始めた。

「せい、やあっ！」

そして、数秒で呼吸を落ち着けた後、もう一度攻勢に出た。

今度は踏み込んで斬り込むことはせずに隙の少ない振りで相手にダメージを与えるとする。

だが、さきほどの大ダメージが抜けきらないのか、剣速は遅く威力もない。

『ガキン！』

「つー？」

その所為で、ガルーのナックルガードを嵌めた拳に容易に受け止められてしまつた。

「なんどつー？」

驚愕する騎士だが、ガルーは止まらない。

「ふつー！」

拳の甲を十字に交差するよつこにして剣を受け止めたガルーは、そのまま左手で剣を受け流す。

そして残った右手の裏拳を、騎士の顔面にぶつける。

「ぐはあつー？」

ナックルガードを嵌めた拳で放つた裏拳は騎士の眉間に直撃し、騎士は吹っ飛んだ。

「ぐつ！　がつ……！　つあつ…ああ……」

騎士は地面に転がり苦悶の声を上げていたが、しばらくすると氣を失つて倒れた。

騎士が氣を失つたことにより、ガルーの勝利は確定し、武闘大会で一勝をあげることになった。

そして、この試合を見た観客は試合の内容とガルーの強さに驚愕し、特に貴族達はガルーの詳細な情報を手に入れる為に従者を大会係員の所へ走らせた。

そしてそんな中で最も驚愕し、田を見開いたままガルーを見つめる女性がいた。

貴族の令嬢アマリーと、その従者リースだ。

「あ、あの方は何者ですか？ 武器も持たず、素手で騎士の方を倒しましたよ！？」

「一応、武具として籠手のよつな物をつけていたようですが……」

「だからひどい、あ、あのよつに勝てるものなのですか？……」

「まず無理ですね。普通は刃物相手に素手で挑めば緊張で体が強張り、動けなくなります」

「で、でもあの方は……」

「よほどの修練を積み、そして相当な胆力がある方なのでしょう。でなければ、剣を持った相手に拳で戦うなんてまともな神経で出来るはずがありません」

「……あの騎士の方が特別弱かったなんて事はない？」

「今大会の優勝候補に名があがっていたほどの方です。それはないでしょ？」「うう……」

リースの答えになにせら少し考え始めた様子のアマリー。

「お嬢さま？」

その様子に従者であるリースがアマリーに声をかけた。何か思いつめたような彼女に少し嫌な予感を覚えた。

そして、その予感は数秒後に的中することになる。

「……ねえ、リース。お願いがあるの」

「……はい。何でござりこましょつか、お嬢様」

アマリーの願いに耳を傾けるリース。なんとなくだが、彼女はその願いに予想がついている。

だが、言葉を先回りすることなくリースは黙つたままアマリーの願いを聞いた。

その内容とは……もちろん。

ガルーという男の情報を出来る限り集める事だった。

武闘大会5 騎士との戦い（後書き）

誤字脱字の報告、または感想など待っています。

武闘大会5 決勝戦

大会は順調に進み、すでに残すは決勝戦のみとなつた。

そして、その決勝戦を戦うのは今大会初出場のガルーと、前大会優勝者の騎士団副団長ノワール。

ノワールは騎士団には珍しい女性騎士であったが、国一番のレイピアの使い手。

ガルーは素手で剣や槍を持つ猛者たちを力ずくでなぎ倒すのに対し、ノワールは細身のレイピアで敵の隙を突き、華麗に勝ち上がつてきた。

その戦いには華があり、観客は大いに盛り上がった。

そして、その盛り上がりは決勝戦が始まると最高潮に達した

『カツ！ カツ！』

『ガツ！ ガツ！』

突き出される剣撃を拳で払い

『ガンツ！ ガンツ！』

『キンツ！ キンツ！』

繰り出される拳撃を剣で払い落とす

両者の拳と剣から繰り出される連撃の数々に、観客が歓声を上げる。

耳がおかしくなるほどの中での音の中で、一人の戦士がさらに攻撃の手を増やす。

皿にも止まらぬ突きの連撃。

それに対抗しての拳の連打。

そして、それを回避する両者の驚異的な見切り。

試合開始から有効打はなく、勝負の行く末はまだ誰にもわからな

い。

それゆえに観客は熱狂する。

どちらが勝つかわからない勝負の結果、その過程の姿に。

観客は熱狂する。

素晴らしい戦いに、それを見せてくれる強き戦士達に。

拳を握り、足を踏み鳴らし、声を枯らし、最後の試合に相応しい戦いを褒め称える。

だが、どんな戦いにも終わりは来る。

ガルーのナックルガードは度重なる攻撃にひしゃげ、ノワールの剣は刀身がなまくらと化している。

『武器』を使って戦えるのは、両者ともあと一撃だけだろう。

つまり、両者の戦いはもうすぐ終わる。

『…………。』

観客にもその緊張が伝わり、闘技場は静まり返る。

「…………。」

「…………。」

一定の距離を保ったまま、ガルーとノワールは対峙する。

ガルーは両の拳を胸の高さで固定し、ノワールは鋭い剣先を相手の喉元に向かつて狙い定める。

そして、両者の緊張感が最高潮に達した時。

両者が動いた。

先に動いたのはノワールの方。

鋭い剣先をガルーの喉元に向かつて一直線に突き出す。

ノワールが得意とする必殺の一撃だが、すでに戦いが始まつてからは何度も破られてきた。

だが、武器がなまくらとなり、ノワール自身も疲労困憊の今では、これが繰り出せる最後の一撃だった。

だが、その最後の一撃は相手に通用しなかった。

突き出したレイピアは目標に当たらず、空を斬る。

「しまつ……！」

空ぶつたと分かり、すぐに突きの姿勢から体を戻そうとするが、疲労困憊のノワールの体はそこで防御に回すだけの力が残っていないかつた。

「おらあつ！」

気がつけばノワールの目前には、先ほどの一撃を紙一重でかわしたガルーの姿が映る。

ガルーはすでに反撃の態勢に入つており、このままではまともな防御も出来ずに直撃を食らう。

「くうつ……！」

ノワールが反射的に身を庇おうとするがこのままでは間に合わない。

だが、その時。

「…ちつ…！」

ガルーの攻撃の軌道が変わった。

ノワールの腹辺りに向かうはずだった攻撃は、何故か武器を持つ

手の方へ。

そして、そのままアッパー・カット気味の拳がレイピアの柄に当たる。

『ガンツ!!』

「つ……」

その衝撃は疲労したノワールに耐えられる物ではなく、ノワールはレイピアを落としてしまう。

「ふつー！」

「うう……！」

そして、その瞬間を逃さずにガルーの拳がノワールの鼻先で止まる。

しばらくノワールは田の前の拳を見つめていたが、最後は悔しそうにこう呟いた。

「……私の負けです」

この瞬間、勝負が決まり。

ノワールは自分の敗北を認め、ガルーの優勝が決まった。

観客はその時、自分の声が枯れるまで声を出し続けた。

その後、優勝賞金や賞状の受け渡しなどを大げさなやり方で渡され、『さあ、帰るか』と思っていたガルーだが、思わぬ事がまだ残っていた。

それは、『大会優勝者祝勝会』だった。

武闘大会5 決勝戦（後書き）

やつと書きたかった所が書けます。
ずつと書きたかったんです。
ガルーの正装姿。

祝勝会1

優勝者祝勝会と言つても、主役が一人だけだというわけではない。

大会上位に勝ち上がつた選手達の殆どが祝勝会に呼ばれる。

これは優勝者を祝うだけの催しではなく、大会で良い成績を残した者達を軍に入らせたり、護衛として勧誘するためだからだ。

その為、この催しの会場である王城の大広間では、毎年いたるところで勧誘する貴族の姿が見られた。

だが、今年は少し様子が違つた。

「もうすぐ陛下もいらっしゃるといふのに、今大会の優勝者は一体どこに?」「正装を手伝つた侍従達は何と?」「それが、もうこちらに向かつたと言つております」「では、すでにこの会場にいると?」「いや、あれだけ目立つ男を見落とすはずがないでしょう」「では、一体どこに?」

毎年、一番人が多く集まるのはその年の大会で優勝した人間の所なのだが、今年はその優勝者が祝勝会が始まつても中々現れず、貴族達が一箇所に集まつて話し込む姿がそこらじゅうで見られた。

「……。」

「……。」

そして、そんな様子を壁際に配置された長椅子に座りながら貴族令嬢であるアマリーとその侍従リースは眺めていた。

彼女たちは今大会の優勝者であるガルーを護衛として雇つためにこうして祝勝会にやつてきたのだが、肝心のガルーがおらず肩透かしをくらつていた。

「…本当にどうしたのかしら？」

「これは私の勘ですが、ここに来るのに迷つているのではないでしょうか？」

「え？」

「王城の中は初見では迷路のよつたものですから、案内もないまま歩けば迷つてしまつ可能性があります」

「ああ、なるほどね」

「ですから、心配などせずとも、その内いらっしゃるでしょう」

「……そうね。祝勝会も始まつたばかりだし、ゆつくり待ちましょう」

そのまま一人はこの後どうやってガルーを勧誘する作戦を色々と話し合つてゐたが、ガルーがこの会場にやつてくる気配はなく、アマリーとリースの話のネタもなくなりだした。

「あつ、そついえば」

だが、そんな時だつた。

アマリーが『その事』に気がついたのは。

「お嬢さま？ どうしました？」

「ねえ、リース」

「はい、お嬢様」

リースは自分の主人の様子を見て、どうしたのかを訊ねた。
すると。

「ガルー選手の正装つて想像出来る?」
「……。」

アマリーにそつ言われて思わず想像してみた。

だが、ガルーのあの鋭すぎる田つきとアウトローのような物腰。
そんな人間が首に蝶ネクタイをつけた燕尾服姿は、はつきり言つて想像が出来ない。

しかし、ガルーは会場に正装して来るはずだ。

「……い、いえ、全く想像が出来ません

そう口にしながら、リースの中で好奇心がムクムクと起き上がり始めた。

「ふふつ」

そして、ビューやらそれはアマリーも一緒にいたようで、彼女は内緒話をするようにリースに向かって小声で「すごい楽しみね？」と囁いた。

そんな会話をしていた彼女たちだが、一人の隣の長椅子で燕尾服姿の『鋭い目つきの男』が椅子に座つて天井を眺めていることに気がついていなかつた。

「彼」はずつと前からそこにおり、会場にいた令嬢などの視線を少なからず集めていたのだが、彫像のように宙をボーッと見ながら殆ど動かない姿に誰も声をかけようとななかつた。

その所為で「彼」が誰なのかを知つた人間などおらず、アマリーとリースは気がつかずに話をしていたのだった。

その『鋭い目つきの男』とは、今大会の優勝者であり、アマリー達や会場中の貴族が待ちに待つてゐる男。

つまり、ガルー本人だった。

「……。」

だが、彼は隣で自分のつわさ話をされているにもかかわらず、ずっと畠を眺めているだけだった。

祝勝会1（後書き）

正装姿を書こうと資料を探しけれど、手元に黒執事しかなかつた。

ボサボサだつた髪は櫛を通して、艶のある黒髪に。鍛え上げられた肉体を包む込んだのは、黒のジャケットとスラッシュス。

そして、白いシャツと首元には白の蝶ネクタイ。

手には白の革手袋と足には黒の革靴。

男性の最上礼服の一つである「燕尾服」

それを身に纏つたガルーは、はつきり言えば目立つていた。

ガルーのような鍛えた体格をした礼服姿の男性といつのはそれだけでも意外に目立つのですが、酒を取りに行くなどして動くと自然と周りの視線を集めた。

しかし、本人はその事を全く気にしておらず、ただ喉の渴きをいやす為に給仕から酒の入ったグラスを受け取った。

そして、グラスを傾け、中の液体を口に含み喉を鳴らす。

『ゴクンッ……』

周りにいた人間はその動作をただぼんやりと見ていただけだが、ガルーが喉を鳴らした音を聞いた瞬間。

背筋が凍つた。

まるで、森の中で肉食獣に出会つたような感覚。

そして、それは今まで関係の無い雑談をしていた人達も同じだつたらしく、会場にいた人間の多くが「感覚」のした方を見た。

すると、そこにいるのは酒を一息で飲み干したガルーがいた。

「「あつ！！」

そこで、何人かの人間がやつと気がついた。

服装がどれだけ変わろうが顔つきまでは変えられるわけがない。

すこし注意深く見てみれば、ガルー本人だとわかる。

だが、今までガルーの勧誘をしようと彼の登場を待つていた貴族達は誰も彼に近づこうとしなかった。

いや、出来なかつた。

一步でもガルーの傍に行こうとすれば、ガルーは近づいてきた人間に目を向けるだろう。

ガルー本人は敵意も何もなくただ見るだけだろうが、貴族はそれだけで身動きがとれなくなる確信があった。

野生の獣の食事の邪魔をどうなるのか？

子供でも少し頭をひねればわかる事を、実践する命知らずはいなかつた。

ただ一人の貴族の令嬢を除き

祝勝会2（後書き）

話が短いですが、活動報告のコメントより頑張ってみましたw

祝勝会③

男性とあまり接したことがないアマリーにとつてみれば、ガルーののような男に声をかけるのはとても勇気がいることだった。

しかし、アマリーは声をかけた。

「あの…ガルー選手ですよね？ 今大会で優勝なさった…」

それがガルーを護衛として雇う為に必要な事であり、また大会優勝者に対する礼儀であつたからだ。

「ん？ ああ、俺がそうだが…。なんか用か？」

声を聞き、ガルーは少し驚いた顔で娘の方に向き直つた。いきなり身なりのいい貴族らしき娘が話しかけてきて驚いたのだ。

だが、会場の中にいた他の貴族たちはガルーのその返答に少し眉をひそめた。

貴族相手に対しての言葉遣いがなつていないと思つたからだ。

しかし、アマリーはそんな事はあまり気にしないのか、特に気にした様子もなく話を続けた。

「……実は、ガルー選手の折り入つて頼みがありまして」

「俺に？」

「はい……、えつと、あの実は……」「

少し言ひよどみながら次の言葉をどうやって切り出そうかと悩んでいるアマリー。その後ろでは侍女であるリースが心配そうな顔で主人の後ろ姿を見ている。

その様子に、ガルーはピンと来た。

「……まさか、俺を雇いたいとかって話か?」

他の大会参加者が貴族たちにスカウトされているのをずっと会場の長椅子で見ていたガルーは、試しに鎌をかけてみた。

すると案の上、その言葉を聞いたアマリーは驚いた顔でガルーの顔をまじまじと見た。

そして、その顔を見たガルーは少しばかり苦い顔をした。

しかし、次の瞬間には表情を引き締めて毅然とした態度をとった。

「……だつたら、悪い。俺は誰にも雇われるつもりはねえんだ。他を当たつてくれ」

そう言つてガルーは給仕に空になつたグラスを渡してどこかに行こうとする。

相手の目的がわかつたガルーはさつさと人気が無い場所へ消えようアマリーのほうを振り返り返りもせずに歩き始めた。

「ま、待つてください……！」

これにアマリーは慌てて追いかけようとした。

だが、ガルーとドレスを着たアマリーとでは歩く歩幅が全く違つ。

距離は縮むことは無く、ただ距離が開くだけとなつた。

「も、もう少しだけ話を……！」

その事に焦りを感じ、アマリーは急いでガルーを追いかけようとする。

しかし、その所為で普段は着慣れているはずのドレスが足に絡みついた。

「あっ……！」

アマリーは慌ててバランスをとるが、足は彼女の思つように動かず、このままでは大勢の人いる前で派手に転ぶことになる。

(ダメ。転ぶつ……！)

今にも転びそうなアマリー。

しかし、それを見逃すガルーではなかつた。

「……何やつてんだアンタ？」

「え？」

気がつけばアマリーの体はガルーに支えられていた。

祝勝会4

「……何やってんだアンタ?」

ものすくべ呆れた声でガルーは皿の前のアマリーに叫んだ。

「あ、あ、あの……!」

だが、それを言われたアマリーは返事を返すことが出来ない。

今、アマリーはガルーに正面から絞り出すように声を出し、体を支えられているのだ。

その状況にアマリーは動搖してしまって言葉が上手く出ない。

しかし、なんとか喉から絞り出すように声を出し、体を支えている手を放してくれるようにガルーに頼んだ。

「て、手を放してもうまいこいつか……」

「いいけど。もう転ぶなよ

それに対してもガルーは小さな子供に注意するよにしてから、ゆっくりと手を放した。

『……トントン』

アマリーが自分の足でしつかりと地面を立ったのを確認すると、ガルーは腰に手を当ててアマリーに質問し始めた。

「何してんだアンタ?」

「ウゥ……」

「話は断つたはずだ。なのになんで追いかけてくるんだ?」

「…………。」

「…………まさか諦め切れないとか、そういう事か?」

「は、はい」

「…………。」

アマリーの言葉を聞いたガルーは苦虫を噛み潰したような顔になつた。

ガルーがアマリーの勧誘を断つたのは、恩人であるテレサに恩を返すためにこれから色々と動き始めようと思つていて、余計な仕事などは入れるつもりがないからだ。

だが、それをアマリーにすべて説明するのはかなり時間がかかるだろうし、なにより面倒だった。

「あー……」

これはどうするか、とガルーは少し考えた結果。

ガルーはアマリーに向かつて、こう言った。

「今、ガキの頃からの目的を叶えられるかもしない大事な時なんだ。……頼むから、それを邪魔しないでくれ」

「「…?」」

その言葉を聞いた人々は驚いた。

ガルーの大会での様子や言動から、彼が人に物を頼むような殊勝な人間には見えなかつたからだ。

そのガルーがアマリーに対して、邪魔をしないでくれ、と頼んでいるのだ。

これにはアマリーも面を食らつた。

「あつ、あの、私は、そんなつもりでは」

今までとまるで違つたガルーの態度に動搖するアマリー。

だが、それにガルーは気づかないのかさらにダメ押しをした。

「……頼む」

軽くではあるが、間違いなくガルーが頭を下げた。

大の男が、公衆の面前で、面子もプライドも気にせずに頭を下げたのだ。

「つ……！」

これにアマリーは完全にやられた。

ガルーの言葉の中にあった「目的」という言葉。

それが何のことなのかアマリーはわからなかつたが、それがガルーが頭を下げている理由なのだとということはわかつた。

怖いほどの強さを持つたガルーが、叶えたいと思っている目的。

その目的の為には、あんなに強いガルーが自分の面子やプライドをあつさりと捨てた。

そんな姿を見たアマリーは、ガルーの勧誘を完全に諦めるしかなかつた。

「……わかりました。残念ですが貴方を護衛にする件は諦めます」

「悪いな」

本当に残念そうに護衛の話を諦めると言つたアマリーに、ガルーはどこかバツが悪そうにそう答えた。

「…………」

「…………」

二人の会話はそこで止まり、それを機にガルーがその場を去り、とある。

「……じゃあな」

「あっ……」

(行つてしまつ……)

ガルーの遠ざかる背中を見て思わず、手を伸ばしかけるアマリー。

だが、その手は中途半端な位置で止まりガルーの背中にほ遠く届かない。

「のままガルーが足を進めれば、声も届かなくなるだろ?」

(ある……)

アマリーの視界から、一步一歩ガルーの背中が徐々に遠くなる。

ふと気がつけば、もつ手の間に距離に背中はない。

言葉なままだ面白くないが、アマリーの口は堅く閉じたままだ。

一步、また一步と、ガルーの背中が遠くなる。

「…………」

しかし、アマリーは口を堅く閉じて別れの言葉口にしてしまうといふ。な

彼女は自分で理解しているのだ。

口を開けば別れの挨拶ではなく引き止める言葉を言いつてしまつ事を。

だから、口を開けてして何も言わないといふ。

ただじっと、ガルーの遠く離れていく背中を田で追いつける。

(……出来るなら、もつ少しだけ一緒に(元)

そんな思いを抱きながらじっとガルーの背中を田で追いつけると、突然アマリーの背後から声が響いた。

「お待ちくださいガルー様！」

「ん？」

名前を呼ばれ足を止めたガルーは自分のことを呼んだ人物の方を見た。

それはすっとアマリーの後方で控えていた侍従のリースだった。

「まだ何か用か？」

「はい。多少お聞きしたい事がありまして」

「仕事の話じゃねえよな

「違います。それとは全くの別件です」

「ふーん。まあ、なら別にいいか。じゃあ何を聞きたいのかさつと言つてくれ

引き止めたことを警戒していたガルーだったが、仕事関係ではないと聞いて安心した。

アマリーとリースのそばまで歩いて戻り、そのまま「何を聞きたいかと言え」と促した。

「先ほど言つていた『田的』という物を叶えた後、貴方はどうす

なのですか？「

「あー、考えた事ないが多分暇になる。で、それがどうした？」

「ではその『目的』が終わつた後、お時間がありましたら私の主人の屋敷にいらしてください。是非ともお嬢様を助けて頂いたお礼をさせてください」

「……招いてくれるのはいいけどよ。……そこで護衛の勧誘とかしねえよな」

「私にそのつもりはありません。私は単なる『お礼』がしたいだけです」「

「……まあ、わかつた。信用する。でもあんたらの屋敷つてどいだ？ 僕場所知らねえぞ」

「では、今住所を書いた紙を渡します。少々お待ちください」

侍従服のポケットから紙とペンを取り出し、そこにスラスラと住所らしきものを書いたリースはその書いた紙をガルーに手渡した。

「これがそうか。じゃあ、目的を叶えたら行くわ

ガルーはその紙を受け取りそれをしばらく眺めた後、手を軽く振つて[冗談まじりに別れの挨拶をした。

「はい。お越しになるのをお待ちしておつます」

それに対しリースは固めの挨拶を返した。

ガルーはリースの横を横切り、そのままアマリーの横を通り過ぎようとした時。

「じゃあ、『またな』」

アマリーに向かつて『再会』の挨拶をした。

「…？」

それまで一人のやりとりをただ見ているだけだったアマリーは、そこでリースがガルーを引き止めた本当の理由を理解した。

つまり、リースはガルーが目的を果たした後、お礼をするという名目で家に招いてそこで勧誘する機会をつくってくれたのだ。

姉のような存在であるリースが与えてくれたこのチャンス。

アマリーは彼女の行動を無駄にしない為、最善の行動をとった。

それは満面の笑顔による『再開』の挨拶。

「は、はい…『また』会いましょう!」

そして、その声は田の前にいるガルーにすぐに届いた。

「おひ！」

さらにガルーがそれに答えたことにより、何もなかつた二人の間

に「約束」という繋がりが出来た。

それは他人からはクモの糸のように細く頼りない物に見える
かも知れないが、アマリーにとつてはどんな物よりも強固に出来た
「約束」という名の糸だった。

祝勝会6

その後、ガルーは祝勝会の中で国王から大会の優勝賞金と賞状の盾をもらつた。

その時、当然仕官の誘いなどもあつたが、ガルーはそれを断つた。理由は「すでに仕える相手がいて、二人の主に仕えることはどちらに対しても不義理」ということらしい。

この言葉を聞いた王も貴族達も「ならば仕方ない」と諦め、最後にガルーの大会での活躍を褒め称えその場を去つて行つた。

だが、祝勝会が進行すると人は徐々に大胆になり、あれほど怖がつていたガルーに声をかける人間が少しづつ出てきた。

ある者はガルーの戦い方について質問をし、ある者はガルーの出自やどこで働く何者なのかをしつこく聞いてきた。

だが、それに対しガルーの返答は要領を得なかつた。

元々、人前で話をするのが得意な男ではなく、自分のことを詳しく説明すると自らが獣人族であることを暴露する可能性があるため、詳しくさせなかつたのだ。

「あーっと、だから生まれはだいぶ田舎の山の中だ

「え？ 何？ 嫁？ いないいない」

「親が決めた許婚？ 何だそれ？」

「好きなモノはどんな奴？ あー、そうだな成るべく食い応えがあつてこうボリュームのある……、なんかアンタやけに食いつくな……まあ、いいや。とにかくそんな感じの『焼肉』が好きだな。種類は牛がいい。牛肉最高」

「父親に基盤は習つた。後はほぼ我流。親父にはまだ勝てる気がしない」

だが、たどたどしく何とか説明をしようとガルーの姿に入々は新鮮な気持ちを味わつた。

意外にもガルーは見た目とは違つて話しやすい男だつた。

じぢらが話している時は好奇心に目を輝かせながら話を聞いて、自分が話す時は素直な気持ちのまま話しをするのだ。

そんな子供のようなガルーの姿に貴族達は見た目どおりの人間ではないと安心していつた。

その為、貴族達は祝いの席でガルーと共にかなりの酒を一緒に呑み、祝勝会は夜が更けるにつれて徐々に場が混沌となつていった。

……だが、女性陣は夜が更けるに連れて徐々に数を減らしてよかつたのだが、男性陣がやばかつた。

殆どが居残り、ガルーと一緒に酒の飲み比べを始めたのだ。

ことの発端はある年老いた貴族がガルーの故郷の風習などを好奇心から聞いた事により始まった。

年老いた貴族はガルーの故郷では宴の席では酒の飲み比べをして終わると聞き、それを聞いた貴族が面白半分にガルーと酒の飲み比べを始めた。

だが、貴族は年のせいでそれほど酒は強くなくワイン数杯で落ちた。

もちろん話はここでおわらず、どこからか「助太刀する！」と酔っ払った他の貴族がやってきて飲み比べに乱入したのだった。

そこからガルーが一人抜きをしだした辺りで人垣が出来始め、賭けも開始された。

国王はこのやりとりを黙認。というか、楽しく見学していた。

おかげでテーブルの上にはワインの入った樽が「デデンツー！」と置かれ、対戦者達は侍従にそのワインをグラスに注がせながらガンガン酒を飲んでいった。

結局その勝負は深夜遅くまで続き、ガルーが十人抜きをした所で勝負は終了した。

そのまま祝勝会は自動的にお開きとなり、ガルーは賞金と賞状の盾を持つて貴族達に手を振りながら会場を去つて行つた。

「じゃつ、また」

「……つむ。今度は負けんぞ」

「楽しかったな。またやるつ

「今度暇があればうちに来い。歓迎するぞ」

「おう

ガルーと貴族達には勝負をした者達の間に生まれる一種の連帯感がおこり、貴族達も気持ちよく手を振りガルーを見送った。

こうしてガルーの大会優勝の祝勝会は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6598p/>

狼の恩返し

2012年1月5日21時23分発行